東方超解釈

触手の朔良

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくあるやつ。古代に飛ばされたオリ主が東方Ｐｒｏｊｅｃｔのキャラとキャッキャウフフするお話です。

独自解釈、超展開、ご都合主義が多分に含まれるのでご注意をば。

どこまで書けるか分かりませんが、ほどほどに頑張ります。

目次

プロローグ
女難の始まり ―――― 1
超古代編
キャトラレ ―――― 25
ファーストコンタクト　前編 ―― 41
ファーストコンタクト　後編 ―― 60
テラフォーミング　前編 ―――― 92

プロローグ
女難の始まり

「もし？　そこのお方、少しよろしいでしょうか？」

深夜。喉の渇きを覚え男は目覚めた。

意識も今一つ覚醒しきっておらず、ふらりふらり。覚束ない足取りで台所に向かい冷蔵庫を開けるも、見事にすっからかんだ。水、という気分でも無かったのだが、仕方なくコップ片手に蛇口を捻るも何の変化もない。

「……？」

蛇口は既に、些かの抵抗も感じさせぬ勢いで回っている。だのに水が出てくる気配は一向に無い。男は目の前の現象に首を傾げ、「あ」と小さく声を漏らした。

そう言えば、今晩から明朝に掛けてまで断水を行うとか回覧板に載っていたような……。

イマイチ確証は得られないものの――何せ回覧板なんて、目を滑らせる程度だ――、だとすれば目の前の現象も納得である。

男は嘆息した。

この乾きを無視して寝直すという選択肢もあるにはあるが、すっかりと目が冴えてしまいそんな気は微塵も起きない。

ちら、と壁掛けの時計に目をやる。短針は二と三の中間を指し、何とも中途半端な時間に目が覚めてしまったものだと更に嘆く。

起きるには早く寝る気にもなれない。とすれば、である。乾きを癒そうと考えるのも道理である。

「……コンビニ、行くか」

身体は未だ泥中にあるかの様に重く、男はノロノロとした動作で寝間着の上からジャンパーを羽織り、踵の潰れたシューズを履く。

玄関を開けると温度差からひゅるりと部屋の中へと、一度切りの風が吹く。

「……さぶ」

暦の上では八月とはいえ、夜になればそれなりに冷える。

――外行きの格好に着替えるか？

その、肌寒さに男は後悔したものの、ものぐさが祟り結局はそのまま部屋を出た。

男が住んでいるのは、二階建ての全八部屋からなる小さなアパートだった。彼の部屋は丁度二階の一番奥、階段から尤も遠い位置にあった。隣人を気遣う必要性が一つ減ると、住まいを探していた当時の彼は深く考えず喜び勇んで入居したものだった。

だが、時折この階段までの短い道のりがとても面倒臭いものに感じた。距離にすれば十メートルもないというのに。普段は全く以てそんな風には思わないのだが、本当に時折、この階段へと向かう行為そのものが億劫で仕方なかった。

そう、感じる時感じない時。「一体何が違うのだろう?」益体もない事を考えながら、他の住人を起こさぬようにゆっくりと歩を進める。

カツンカツン。

靴底が鉄製の階段を踏み鳴らし、金属音が夜の暗闇に吸い込まれる。

面倒くさい階段を降りきると、変哲のない団地が彼を出迎えた。両脇を塀に囲まれた路地をウネウネと進み、一路目的地のコンビニを目指す。

「ありがとーございしゃー」

やる気の無い挨拶を背に、男はコンビニの自動ドアをくぐった。

手提げたビニール袋からは数本のペットボトルとスナック菓子。朝食用の弁当が詰まっている。

一歩二歩。歩いた所で足元から伸びる影を見、彼は何ともなしに振り返る。

二十四時間消える事のない明かりは、夜の闇に於いて異質に感ぜられ、彼はぶるりと震えた。

少し、風に当たりすぎたか。

そう思った彼は行きよりも少しばかし足を早め帰路に着く。
妙に品揃えが悪かったな、だとか。深夜の店員は男しか務められないのだろうか、だとか妙ちきりんな事を考えながら。
そんな折であった――。
「もし？　そこのお方、少しよろしいでしょうか？」
何処からともなく声が聞こえた。
一瞬足を止め辺りを伺うも、声の主は見当たらず、気のせいという事にして男は帰ろうと――。
「えぇ、そう。アナタです」
「んあ？」
そも自分に向けられた物だとは微塵も思ってなかった故、その言葉は完璧に彼の不意を突いた形となり、自然と口から変な言葉が漏れた。
もう一度、くまなく周囲に目をやると、通り過ぎたビルとビルの隙間から白い腕が伸びているのが目に入った。
ちょいちょい、と彼を誘うように手招くそれに、内心は面倒になってきたという気持ちで一杯になっていた。
……何も見なかった、聞かなかった事にして帰ってしまおうか？

そんな邪な考えが彼の脳裏に過ぎった時、「あの？　すいません……？」何時まで経っても反応が無い事に不安を覚えたのだろう。先程よりも弱気な声が隙間から発せられた。

声から察するに、若い女性のようだ。

「ちょっとお～？　……もしもーし？」

怪しいセールスかその類かとも疑ったが、女相手なら最悪なんとかなるだろうと踏んだ男は、髪を掻きむしりながら隙間に近寄った。

というか姿の見えない相手なれども、涙声で訴えられると流石に良心が苛まれたのだ。

近寄るにつれ徐々にビルの影から現れたのは、頭まですっぽりとフードを被った、多分女の子がいた。少女の目の前には小さなテーブルと水晶が置かれており、見るからに怪しさ満点である。

早速己の選択に後悔している男に、少女は語りかける。

「ふっふっふ。ようやく来たわね」

最初の厳かな口調は消え、何というか、子供っぽい喋りになっている事を彼女自身気付いているのだろうか？

……いや、いないのだろうな。

兎も角彼女は男が戻ってきた事に――フードで表情を隠されて尚解るぐらい――満足そうに頷く。
「あー？　宗教の勧誘ならお断りなんだが？」
「ちょっ！　違うわよ！　そんな怪しいヤツらと一緒にしないでっ！」
厄介そうな事は早々切り上げるに限る。
先んじて男が牽制すると、心外だと言わんばかり少女はプリプリと怒りを露わにする。
しかし、少女の背は男の胸元にも届かない。座っている事を差しいて引いても、頭二つ分は小さいのではなかろうか？　そんなちみっこい、おそらく年下の少女に凄まれても怖くも何ともない。どころか、ともすれば頬が緩んでしまうまである。
――一緒じゃないのか？
その言葉を口にしていたら、益々面倒な事になっていたろう。寸での所で呑み込んだ自分を褒めてやりたい。
「何の用だ？　出来れば手短に頼みたいんだが」
「うっ……。ノリが悪いわねぇ。分かったわよう……」
少女は恨みがましい目――再三言うがフードに隠れ、顔は見えないのだが、少女は全身から分かりやすく感情を表現していた――を向けてきた。

男からすれば堪ったものではない。知らんがな、と一笑に切り捨てないだけ有難く思って欲しい。

少女はコホンと一つ咳払い。居住まいを正し男と真正面から相対する。空気が張り詰め、打って変わった真剣な様子に、釣られて男も背筋を伸ばす。

ゴクリと生唾を飲んだのはどちらか。

フードの裾を押し退けるように、ゆっくりと少女の腕が上がり、ズビシと男の鼻先に指が突き付けられた――！

「ズバリ！　アナタ、女難の相が出ているわっ!!」

「帰るわ」

「あーん待ってー！」

くるりと体を翻す男の腰に少女はしがみつく。その大胆さも然ることながら、テーブルから乗り出し男にしがみつくその速度に彼はギョッとした。というか出会ったばかりの男に抱きつくか普通!?

「えぇい、離せ！　離さんか！」

「もーちょっと……！　ちょっとだけ！　ちょっとだけでいいから付き合って！　ね、ね!?」

どんなに怪しかろう胡散臭かろうと、相手は女である。実力に訴える事も出来ず、彼

は身体を左右に揺すった。吊られて少女も左右に揺れる。されど腰に回された腕は緩むどころか更に力を増していった。

一体何が彼女をここまで必死にさせるのか。

男は気付かれぬよう小さく嘆息し、大人しく両手を上げた。少女は抵抗が無くなったのを不思議に思いゆっくりと顔を上げると、両手を上げる男の姿が目に入った。状況が理解出来ずきょとんとした表情を見せてくる。

ローブなら、先に揺さぶられたせいですっかり外れてしまったよ。

「分ぁーった。分かりましたよ。降参、降参します」

そう、男の口から聞いた瞬間、少女の顔がぱぁっと笑顔に染まる。

「ふふーん。そうそう。最初からそうやって殊勝な態度を取ってればいいのよ」

「やっぱ帰っていい？」

「あーん！　ごめんなさい嘘です帰らないでー！」

鼻高々な少女の態度にイラっとするなと言う方が難しい。男が帰る素振りを見せると、少女はすかさず抱きつき行動を阻害してきた。

チッと男は一つ舌を打つ。

「あーもー。話進まんから。何だよ何の用だよ」

「ええっと、ちょっと待ってね」

このままでは話が何処までも脱線していきそうだ。
仕方なく男の方から先を促すと、少女はいそいそとフードを被り直し、テーブルに座り直す。そしてコホンと一つ咳払いをして、ゆっくりと腕を上げ――。
……ん？　これってデジャヴュじゃね？
「ズバリ！　女難の相が出ているわ！」
鼻先に、指を付けられた。
「……」
「女～難の～相が～――」
「分ぁーったっつーの」
「アイタ！」
無反応を貫き通していると、突き付けられた指先がぐるぐると動き始めた。催眠にでも掛けようかというその動きにイラっとした男は、思わず少女の脳天目掛けてチョップを振り下ろしてしまった。ズビシ。擬音が綺麗に聞こえるほど華麗に決まり、少女は頭部を抑え涙目に蹲る。
「あいたー……。信じられない、女子高生に手を上げるなんて……」
なんと、彼女は女子高生だという新情報が明らかになった。至極どうでもいい。
というか、こんな夜中に女子高生が一人、何をやっているのだと疑問が湧き上がるも、

少女の言動、行動を見て「あぁ」と彼は直ぐ様自分の考えを否定した。
今までの短いやり取りですら解る。彼女のような人間は、とても常識に当て嵌められるような存在ではないと。
「はぁ～……。それで？　天下の女子高生様が占いの真似事か？　こんな時間に？」
「真似事じゃないわ！　本物よ！」
「ハッ！　本物ならなおさらどうしてだよ」
男の中で既に警戒心は失せていた。だが、疑心だけはシコリのように残っている。
鼻で笑い、見下すように問い詰めると、彼女は腕を組み「そんなの――」と一拍置いて当然のように言い放つ。
「趣味よ！」
むふー、と鼻息荒く自信満々に告げる少女。そのように断言されてしまっては、彼には言葉を失う他に術がない。
「えぇ、趣味よ。趣味なのよ。あ、でも占いに関しては本当よ？　私にはね、他人とは違う不思議な能力があるんだからっ。超能力ってヤツよ」
「だからそう、人を指差すのをやめーって」
少女は腰を上げ、ズビシと鼻先に指を突き付け見事なドヤ顔を作る。三度突き付けられた指を払うと同時、少女は「あれ？　何で今日会ったばかりの人にこんな事話してる

のかしら?」と不思議そうに首を傾げていた。その意見は男にしても同意である。何せ道端で急に呼び止められたかと思えば、女難だ何だと難癖を付けられるのだ。全く訳が分からない。

「あ、そうよ！　そんな事じゃなくて女難よ！　女難の相なのよ！」

むむむと自分の言動に唸ったかと思えば今度はハッとして、突如興奮し机をバンバンと叩く。打撃音はビルの壁に反射し想像よりも遥かに甲高く響いた。時間が時間なので、男が非難がましい視線を送ると、少女も直ぐに察したのか、耳まで赤くして俯いてしまった。

これまた話に時間が掛かりそうだ。

「その女難の相だが、俺にも心当たりがあるぞ」

嘆息しながら男がそう言うと、少女の反応は顕著だった。その瞳は期待に輝いている。キラキラとではない。爛々と、ある。

「でしょでしょ!?　いやぁ～、やっぱり、って言うか?　さっすが私、って言うか?」

くふくふ、と気味悪く笑い身体をクネらせる様ははっきり言って気色悪い。

自らの身体を掻き抱く少女に、男は今までのお返しとばかりに指差してやった。その意味が分からず彼女は頭に疑問符を浮かべている。

男は一度自分を指し、更に指先を翻して少女を指す。それでも少女は小首を傾げるの

で更にもう一度、今度は少女もそれに倣って同じ動きをした。

「現在進行系で女難にあってる」

最初少女は意味を理解していなかったようだ。

二人の間に沈黙の天使が舞い降りた数秒後。

ようやっと理解したの少女の顔が、瞬間湯沸かし器もかくやと言う勢いで真っ赤に染まる。

「え!?　その、ちょっ……、私っ!?」

ワタワタと慌てる動きはまるで小動物を思わせ可愛いという感想が浮かぶ。

そう、可愛いのだ。

ローブが脱げていたのは僅かな間に過ぎない。だが、その少しの時間でも彼女の顔は印象に残るぐらいに魅力的に写った。

二房に纏められた栗色の髪。縁の厚い眼鏡は一見野暮ったい印象を相手に与えるも、その下に隠された瞳はまんまるで、若干年齢よりも幼く見える顔立ちだが、十分に可愛いと言えるだろう。

髪と同じ色の瞳が、驚愕に彩られている。

少女はこういう事にはからっきしなのか、先程まで自信満々に反り返っていた背は丸まり、顔は俯いてピクリとも動かない。その姿はネジの切れた人形を連想させた。

無意識の内に、男の顔が綻ぶ。

――からかわれた。そう、彼女は感じたのだろう。羞恥に染まっていた頬が、今度は憤怒に染まってゆく。

非道い誤解である。しかしまぁ、その誤解を解く労力と手間、そして得られる結果を天秤に掛け、面倒になった男は素知らぬ振りして平然と話を進めた。

「それで？　お前さんが言うには、女難の相とやらが俺に出ているってことか？」

「アナタねぇ……」

男の無神経さ、図太さに少女は呆れ返る。すっかり毒気が抜かれたようで、深い溜め息を吐いた。

「はぁ～……。こんな人なら呼び止めるんじゃなかったわ……。ん、まぁ仕方ないわね。」

彼女も彼女で、初対面を相手に随分と失礼な物言いである。

「私がアナタを呼び止めたのは、アナタが今まで見てきた中で一番酷い、女難の相が出ていたからよ」

「ほう」

少女の目つきは鋭い。そこに若干の非難の色が残っているのは、先の応酬の尾を引いているからなのかもしれない。しかし、それだけでは説明が足りぬほどの、真剣な色を

帯びていた。
言われて彼は考え込む。
女難、女難ねぇ？
人生を振り返ってみるも、特に思い当たる節は無い。その余りの的外れっぷりに、男の喉が鳴った。
「そんなものがあるなら、少しはあやかりたいもんだ」
「ちょっと！　ふざけないの！　……本当にひどいんだからね、アナタ」
「……そんなにか？」
彼が皮肉げに口を歪めると、自称超能力者は強く彼を責めた。
その声音は紛れもなく本気で、信じていなかった彼の心に「まさか」、と思わせる十分な迫力があった。
「いい？　仮に――アナタの女難の程度を、とりあえず百とするわ。次に私が見てきた中で二番目のヤツを同じ基準に当て嵌めると――一にも満たないのよ」
「――」
ビシと少女は指を立てる。その姿に、男は絶句するしかない。
いやいやいや。流石に大袈裟に過ぎるだろう、と。
こうまで人を騙そうという気概が見られないと、いっそ清々しさすら覚える。

だが、彼女はじいっと男から視線を外さず、表情も崩さない。しばし二人の視線が絡み、無言の一時が流れた。

「……マジで？」

「マジもマジ。大マジよ」

一縷の望みを込めて聞き返す。その声は思いのほか小さく、彼自身驚いたほどだ。

少女の目は、マジだ。本気と書いて大マジだった。

男は愕然とした。最初にあった猜疑心など今や欠片もなく、目の前の少女の言葉を信じてしまっている。

「という訳でね。あまりの物珍しさについ声を掛けちゃったのよ」

「なるほどなぁ。それで、俺はどうしたらいいんだ？」

「え？」

少女は「何を言ってるんだコイツは？」という表情をした。

男も「何を言ってるんだコイツは？」という表情を返した。

「……いや。フツー占いってのは悪い結果が出たら、どうすればいいーとか。こうすればいいよーとか、言ったりすると思うんだが？」

その台詞に少女は苦虫を噛み潰したような顔をした。気まずい沈黙が舞い降りる。

「おい……」

「さ～て。そろそろ帰ろうかしらね～」
　少女はわざとらしく口笛を吹き――唇からはひゅうひゅうと情けない音しか聞こえない――、決して男とは視線を合わせようとせず、いそいそと占い道具を片付け始めた。
「ちょっと待て！　人を不安にさせるだけさせておいて、ハイ終わりなんて事は許されんぞ！」
「きゃっ！　やめっ、腕掴まないでよ！　人呼ぶわよ！」
「シャレにならんからやめーや！」
「大体、占って欲しいならそれなりの対価ってもんがあるでしょ!?　教えてあげたのだって善意からなんだし！」
「む」
　確かに。彼女の言葉にも一理ある。
　抵抗する少女の腕を解放し、男は財布を取り出した。
「ほら、これでいいだろ」
「……小学生の小遣いかっ！」
　男は五百円玉を少女に握らせた。どうやら不服なようで、少女は硬貨を地面に叩きつけた。何と罰当たりなヤツめ。
「チッ。ケチなやつ」

「どっちがよ!?」
悪態を吐きつつ、不承不承紫式部を取り出してやる。
「ほら。これでいいか」
「これまた随分と古いお札ねぇ……。もう一声って言いたい所だけど、まぁいいわ。珍しいし。それじゃ、水晶の正面に立ってくれる?」
指示通り、男が正面へと移動するのを見計らい、少女は水晶に手を翳す。
目を瞑り、ボソボソと何事か呟くも、正確な音は聞き取れない。
「おぉ――」男が感嘆の声を上げる。如何なるトリックか、水晶がぼんやりと紫の光を放ち始めた。
「見える、見えるわよ……。アナタの運命がっ」
胎動するかのように明滅を繰り返す光は、徐々にその明るさを増してゆく。そして一際強く光を放った瞬間、少女はくわと目を見開き気炎を吐いた。
「さぁ、水晶よ!　彼の者の運命を写しなさい――!」
刹那、一面を光が包んだ。男はその眩しさの目を細め手でひさしを作るも、視界の全てが真っ白く意味の無い行動であった。
一瞬だったのか、はたまた長い間だったのか。現実離れした光景に、男の時間の感覚が狂う。そしてやおら光の波が引くと、水晶に手を翳したままの少女がいた。確かな手

応えを感じ、少女はニヤリと口角を吊り上げる。
だが、彼女の予想に反する事態が起こった
「へ？」
ピキ――。
……嫌な音が響く。
耳を澄まさなければ聞き逃してしまうぐらいにか細い音だ。
空耳か？　そう、男が思っている最中に、同様の音が連続で響いた。
ピキ、ピキピキ――。
空耳などととぼけていることは不可能であった。目の前の水晶に、目に見える程の亀裂が入る。その亀裂は徐々に大きさを増し、遂に水晶は真っ二つに割ってしまった。
「……」
「……」
沈黙が、少女を責め立てているかのような沈黙が。
「さ、帰りましょうかね」
「おおぉい!?　ちょっと待て!!」
何事も無かったかのように片付けを再開する少女に、反射的にツッコミを入れてしまう。

「どうなってんだよ！　どういうことだよ！」
「そ、そんなの私が知りたいわよ！　こんな風になるのなんて、初めてなんだからっ。というか弁償！　弁償してよ！　この水晶、高かったんだからねっ」
「おぉう……」
　男が必死に詰め寄るも、少女はそれ以上に声を荒げ反論した。一転して立場が逆になる。
　よく見ると彼女の眼尻には涙が浮かび、その圧力に屈した男の腰が一歩引ける。
「あっ！　今頷いたわよね！　そうよね!?　」
　ハイお金、と言わんばかりに差し伸べられた手。男は、その小さな掌と少女の顔を交互に見やり、諦めたように溜め息を吐いた。
「毎度あり～」
　結局、先程の二千円と合わせて、占めて総額七千円の出費である。そう言えば、最初に渡した五百円玉もちゃっかり回収されてるからプラス五百円か。
　何でコンビニに行こうとしただけで、こんな目に合わにゃならんのだと、彼は内心愚痴を零す。
「……やっぱり、悪徳商法じゃねぇのか」
「む。まだ言うのね。本当だって言ってるのに」

この際彼女の能力が本当かどうかなど些細な事。不安を煽られ、金を毟られる。男からすれば、それ以外の何物でもないのだから。

しかし少女は詐欺扱いされたのが気に入らないのか、唇を尖らせている。そして名案を思いついたとばかりに表情を変えた。

「そうだわ。私ばかり貰うのもなんだし。はい、コレ」

「……何だ？　水晶の欠片じゃねぇか」

少女から手渡されたのは、掌に収まるぐらいの、小さなガラス片だ。一部に丸みを残した形状から、男は先の水晶だと判断したが、少女は頭を振る。

「ただの水晶じゃないわ。それはオカルトボールと呼ばれる、願いの叶う水晶の欠片よ。今は何の力も無いけどね」

「じゃぁゴミじゃん……」

オカルトボールの欠片を指に挟みまじまじと、あらゆる角度から眺めてみるも、そんな大層な物には見えない。

横の少女が、「コレだから素人は……」とアメリカンテイストばりに肩を竦めている様子がムカつく。

男は欠片を乱暴にポケットとへしまい、少女に背を向けた。

「んじゃま、俺ぁもう行くわ」

「あれ、帰っちゃうの？　これから私の、オカルトボールを巡った武勇伝が――」
そこまで喋り、少女は唐突に口をつぐみ「口止めされているんだった」と苦い顔でぼやいた。
なんじゃそりゃ、と男は苦笑し振り返る。
「お前さんも、あんま親に心配掛けるもんじゃねーぞ？」
「何よ偉そうに。――あ、そうそう。私の名前は宇佐見菫子。天才超能力者よ。まぁ、また占って欲しくなったらここに来なさい。月一ぐらいでやってるから」
――それじゃぁね。
少女――菫子がローブを翻すと、男は驚きに目を見張った。何せ先程まで存在していたテーブルと散乱した水晶が跡形もなく消えているのだから。
超能力者なんて、眉唾だと思っていたが案外彼女は本物なのかもしれない。
菫子は既にこちらへの関心を失ったのだろう。只の一度も振り返ることなく、夜のビル街へと姿を消していった。
何故かその姿を最後まで見送って、彼はボソリと呟いたそうな。
「月一じゃ会う方が難しいだろうよ……」
全く、その通りである。
男は自分で言って可笑しかったのか、ククと喉を鳴らして笑い、ようやくして帰路へ

着くことが出来た。
飲み物一つ買いに出たつもりが、とんだ騒動である。
彼は家に辿り着くと、折角買ったペットボトルの蓋も開けずにそのまま布団へダイブした。そしてシーツに埋もれた顔を少しずらし、横目に時計を見ると三時を回ったばかりである。
菫子という少女があまりに強烈で、やけに長く感じたものだが、それ程時間は経っていなかったらしい。
男は口角を吊り上げ、枕に顔を埋める。
何にせよ、偶にならこんな出来事も日常の良い刺激である。そんな事を思いながら、男の意識はゆっくりと眠りに落ちた。

そして次に彼が目を覚ました時――。
『本当に大切な物は失ってから解る』などという言葉は時代を問わず国を問わず、掃いて捨てるほどある。何て陳腐な言葉なのだろう、と思う一方で真理だとも、思わずにはいられない。
――日常は粉々に消え去っていた。
目の前に広がる光景に呆然とする男。一言で云うなら死の世界。そう、表現するのが

一番しっくりとくるだろう風景。

空は分厚い黒雲に覆われ、陽の光を悉く遮っている。だのに彼が世界を認識出来たのは、絶え間なく轟く青紫の稲光が周囲を照らし上げていたからだ。

ストロボのように照らされた大地は赤く、灼熱の溶岩がそこかしこから吹き出し、幾つもの大河を成していた。それらが冷えて形成されたと思われる黒岩は無数のスポンジ状の穴が空き、固まって尚熱く、立っているだけでも汗が吹き出す。

ひゅうひゅう、とやけに耳に付く音は己の呼吸音だった。その度に灼けた空気が肺を焦がし、不快さに顔を歪める。だとも呼吸を止めるのは死と同義である。彼は出来る限り浅く、呼吸を最小限に留めるよう努めた。

変に丸みを帯びた黒岩が、幾重にも層になった大地の更に遠くへ目をやるも、何処までも何処までも、それこそ世界の果てまでも同じ光景が広がっていた。

生命は勿論、人工物も何一つ見当たらない、原初の世界。

地獄――。そんな単語が、不意に彼の脳裏へと浮かび、こびり付いて消えなかった。

「ハ――ハハっ」

自然と喉から乾いた笑いが漏れる。ただそれだけに付随した呼吸でさえ、彼の腔内から水分を奪い、全身からは止めどもなく冷や汗が溢れ出した。

「ああ、そうか。こりゃ夢か。ああ、何だ夢か夢だよ夢に決まってんだろ……！」

ならばと彼は横たわった。

煎餅みたいに潰れた愛用の布団――は当たり前のように存在せず、剥き出しの岩肌がそこにはあった。決して寝るに適した場所ではないのは重々承知だが、彼はそこへと寝そべる。岩の下から伝わる熱は、とても夢幻の類には感ぜられなかったが、彼は無理矢理にでも目を瞑りひたすら念じた。額に脂汗を浮かばせながらも、早く覚めろ、覚めろ、と。

――彼の夢が覚める事は、二度となかった。

超古代編
キャトラレ

幸いな事に、或いは不幸にも、男は飢えで死ぬ事は無かった。
水分も食料も、一切摂取していないと云うのに、何故か彼が死ぬ事は無かった。そう気付いたのは、目の前の光景を現実と受け入れてから、おおよそ三日後の事だった。
話は前後するが、これは彼がこの世界を夢幻だと願おうとして、叶わなかった後の出来事である。
人間あまりにも非現実的な光景を前にすると、却って冷静になるらしい。男はその事を、身を以て実感していた。
はたまた、頭の何処かでは楽観しているのかもしれない。こんな世界に来たのなら、元の世界に戻る事も可能だろうと。それは矢張り、現実を正しく理解していないからこそ生じる認識なのであるが。
兎角、彼は意識を取り戻した後、現状の認識に努めた。
まず自分。自室で寝た時の格好をし、特に変わった点はない。
そして周囲に視線を向ける。そこに自室は無く、灼熱と暗黒の世界が広がっていた。

判断材料はあまりに乏しく、推測を始める切っ掛けすら無い。しかし彼は、漠然とだがここが自分の住んでいた世界ではないのだと確信していた。

何度夢であれと思ったか。幻であれと願ったか。

しかし、肌を突き刺す灼けた空気が、嫌というほど彼に現実を突き付けて来るのだ。

彼は状況を打破する為に、又は逃避する為に、周囲を散策する事にした。

目に止まった小高い岩山を目指し動く。

素足から伝わる熱はともすれば火傷をしかねない。と言うか既にしていた。

だのに平然と歩いているのは、まぁ順を追って説明していこう。

岩山への道は標も獣道も無く、彼は悪戦苦闘しながらもどうにか進んでいた。進もうとする事に意識を割き過ぎたあまり、地面そのものへの注意が散漫になってしまったのだろう。

彼が踏みつけたその岩肌は、未だ炭の様に僅かに赤みを帯びていた。

ジュウ――という肉の焼ける音。次の瞬間、襲い来る激痛。

「ぐっ！　がああぁぁぁああぁ!!」

彼の判断は素早かった。直ぐ様その場から飛び退くも、着地した先の足場も悪く、彼は勢いそのままに転倒する。

身体のあちこちをしこたま岩に打ち付け、全身に擦り傷と青痣を作る。しかしそれよ

りも、足裏から伝わる痛みの方が何倍も痛かった。

「ぐ、うぅぅ……！」

傷跡を見て、青ざめる。

足の裏の皮膚がベロンと剥がれて、ピンク色の肉が剥き出しになっているのだから。

一瞬、男の意識が遠のくも、激痛がソレを許してはくれなかった。

目尻に涙を浮かべながら、「どうする？」なんて馬鹿な考えが浮かぶ。何せ治療器具など、ありはしない。何をどう、処置を施すと云うのだ。

ふと、涙に歪んだ視界の端、唯一の人工物である身に纏った寝間着が目に入った。

迷いはない。

彼は裾口を噛み、力任せに引き千切る。形も歪で衛生状態も決して良いとはいえないが、包帯の代わりにはなるだろう。

ヒイヒイゼイゼイ。痛みに顔を歪めながら足にボロ布を巻き付けようとして、驚きのあまり布を落としてしまう。

見るも無残な状態だった足裏は、既に出血が止まっており、他の部位よりも色の薄い皮が張られていた。

不審に思いながら恐る恐る指先で触れてみると、紛れもない、柔らかくはあるが確かに皮膚だ。

痛みもすっかり引いている。だが、彼の胸中には歓びよりも気色の悪さが先に立った。

ともあれ傷が癒えたことには違いない。再び、岩山の天辺を目指し歩き始める。

道中、当然ながら先ほど手痛い目にあった現場を通る羽目になる。そこには黒く炭化した、自身の一部だったものが異臭を放ち残っていた。

そう、男の理解が追いついた瞬間、胃酸が食道を刺しながら喉元をせり上がってくる。我慢する間もなく吐き出すと、また別の異臭が周囲に立ち込めた。

肉の焦げる臭いと吐瀉物の臭い。酷いものだ。男は鼻を摘み、早々にその場を去った。

という紆余曲折を経て、彼の視界が開けた。

ようやく当初の目的地であった、天辺まで辿り着いたのだ。

だが、彼の胸に去来したのは全身を包む達成感ではなく、この身を散り散りに切り裂いてしまうような深い絶望感であった。

「あぁ――」

延々続く灼熱の大地を目にし、零れた彼の言葉はやけに落ち着き払っており。

「――死ぬか」

その横顔は何処か晴れ晴れとさえしていた。

幸いにも――本当にそうだろうか？――、彼の背後には丁度良いマグマ溜まりがある。

激しく噴火はしていないものの、ぐつぐつと泡立ち渦を巻くソコは地獄の入り口と呼ぶに相応しい。

ほんの少し。ほんの少し足を踏み外せば、直ぐにでも火口へと真っ逆さまに落ちることが出来よう。

クッと男の喉が鳴った。

そして全身から力が抜ける。身体が傾き、火口へと吸い込まれてゆく――寸前、彼は踏み止まった。

今更、死ぬことが怖くなったのか？

――怖い。確かに怖いが、死ぬ事は怖くない。死ねないことが、怖いのだ。

死の覚悟を決めた刹那、彼の脳裏に一つの考えが過ぎった。

それは先に見せた、超常とも思える再生能力。

万が一。万が一にもこの再生力が溶岩と拮抗してしまったら、あまつさえ上回ってしまったら。待ち受けるのは、文字通りの生き地獄である。

そう、一度でも考えてしまったら、もう彼は動けなかった。

ひたすらその場で竦み上がり、歯の根がカチカチと鳴る。肌をひび割る程の熱波が渦

巻いているというのに、彼は寒気が止まらなかった。
涙は既に枯れている。
「ちきしょう……」
彼から零れたのは弱々しい呟きだけだった。
「ちきしょう、ちきしょうっ……！　何でっ！　何で俺がこんな目に……！」
ひたすらに嘆く。この身に舞い降りた理不尽に嘆く。
その事に同情する者もケチをつける者も、誰一人いない。
彼一人しかいない。

することが無い。何も、無い。
それからの彼は火口から動く事もせず膝を抱え、ただ溶岩が流れる様子をじっと見ていた。はたまた不意に顔を上げ、黒雲の中で存分に暴れる紫電に目をやった。
時折、火口が爆ぜ溶岩が飛び散る。無論、男にも降り掛かる。
だが彼は逃げようとも避けようともせず、灼熱の雨を呆然と受け止めた。
脚を抉り腹を抉り肩を抉り、全身に蓮の如き無数の穴が開く。
自ら死ぬ勇気を失った彼は、これで死ねるかな、なんて冷静に脳が思考した事実に直ぐ絶望する。

彼が察した通り、死ねる、なんて甘い幻想は打ち砕かれた。
見通しの良くなった身体は、直ぐ様修復を開始し、ものの数分で綺麗に穴が塞がってしまった。最初から穴など開いていないんじゃないか？　そんな疑念を抱いてしまうほどだ。
だが、傷を負った箇所に在る病葉の如き皮膚が、事実を静かに物語っている。
何時しかそんな痛みですら、彼に取っては歓迎すべき刺激となっていった。
それほどまでに、何も無い、世界。
いや、変わった物もあるか。それも、急激に。
それは男の精神だった。
それも已む無しであろう。変化の乏しい世界を何年も何十年も何百年も何千年も何万年も何億年も、……独りで過ごしていたのだ。
年月が彼の心を枯らすだろうことは、想像するに容易かろう。
達観した、といえば聞こえも良いだろうがどちらかと云うと老衰したと、現す方が事実に近いか。
だが、そんな、乾燥し岩の様になった彼の精神を動かす事態が訪れる。
「……？　なんだ……？」
久々に言葉を発した喉は意外にも正常に働き、意味のある音を紡いだ。

トンと何かが頬を叩いた気がした。
多分、気の所為だと、少しだけ周囲を目で確認し、何事も無かったかの様に視線を正面へと戻す。
無限に思える程存在していた溶岩はすっかり消え失せ、そこにはすり鉢状の噴火口の跡だけが残っていた。
男がこの世界に来てからを考えれば、驚くべき変化である。
しかし、これ程大きな変化であるにも関わらず、永年景色を見続けていただけの彼はそれすら気付かなかった。
例えば、海からコップ一杯の水を掬って下がった水位に、気付く者はいないだろう。
故に一日一杯、水を掬って、掬って――。気の遠くなる年月を掛け遂に大海を干上がらせる事に成功すれば、誰も気付かない――なんて。
馬鹿馬鹿しい妄想である。そも、海水は何処へやったのかという現実的な問題も然ることながら、この世界を構成する重要な要素の一つが、すっぱり消え去ってしまえば気付かない訳がない。
日に日に、いや、年々量の減るマグマ。冷える空気。
それでも彼は気付かなかった。気付けなかった。それほどまでに――心が摩耗していた。

では、そんな男の心を動かしたのは一体何なのであろう？

トントンと、彼の額を何かが叩いた。

最早気の所為で済ませる事は出来ない。

男は顔を上げる。

「あ……？」

頬に、額に。冷たい、冷たい水滴が垂れた。

「あ？　あ、あっ……！」

水滴の数、勢いは次第に増してゆき、遂には視界を覆うほどの豪雨と成った。

「雨だ――――――っ!!!!」

その時の喜びようと言ったら、おそらく、彼の生涯でも一二を争うほどだったろう。

「っていうか降りすぎじゃね!!?」

言葉の内容とは裏腹に、口元は綻び、口調もそれに伴っている。

さて。雨が降り始めてから――日光は未だ遮られ、男が時間を解する手段は己が感覚のみである――年単位の歳月が過ぎようとしていた。

それもその筈。今までは溶岩が、大気中の水分そのほとんどを雲にしていたのだから。

そのツケ、とも云うべき量が今正に降り注いでいるのだ。ちょっとやそっとじゃ、止む訳がない。

雨は増々その激しさを強めていく。

五里霧中どころではない。一メートル先の視界すら、濃密な雨のカーテンのせいでハッキリと視認することも出来なかった。

しかし彼にとっては、そんな事は些事も些事である。

「ヒャ――ッホォォオウウゥゥ!!　水だあぁぁ――――!!!」

雨が降り始めてからというもの、男は嘘のように精力的になっていた。

まぁ、彼の過ごしてきた刻を考えれば、さもありなんではあるが。年齢だけで言えば億越えのおじいちゃんなのだから、ちょいとばかしハシャギ過ぎじゃあるまいかね？

一体何処の誰が達観した、なんて言ったんだ。

状況は依然として絶望的である。にも関わらず、彼は悲壮を何処かに忘れてきてしまったように、生まれたままの姿で――服なんてとっくに風化している――雨の中、腕を広げ全身でその恵みを享受していた。

端から見れば、間違いなく狂人の類である。誰もいないが、いたとしても男の取る行動は変わらなかったろう。

彼は人間が生きるにあたって水という存在が如何に重要かを噛み締めている最中な

のだから。
口を開けば腔内から喉へ、体内へと水が流れ込む。それが癒やしてくれるのは喉の乾きばかりではない。ひび割れた心も優しく癒やしていった。
それに、である。
水が出来た、という事はだ。何らかの拍子に生命が産まれる可能性があるという事だ。
そしてゆくゆくは、自分と同様の知的生命体が現れるかもしれないのだ。
全く、気の長い話だ。また、何万何億という年月を待つというのか、この男は。
その通りである。気の遠くなる話だ。最早それは常人の思考ではない。
しかし結局の所、彼に取れる選択肢は限られている。ひたすらに嘆き、絶望に打ちひしがれて待つよりも、希望を抱いて——在るかどうかも解らないが——待てるなら万倍マシだろう。
「いやぁ！　楽しみだなぁ！」
降り止まぬ豪雨の中、男の喉が喜悦に鳴った。
——そして存外早く、彼の希望は叶う事となる。

雨が止み海が出来、空の青さにひとしきり感動した後の事。

「ふんふふ～ん♪」

下ッ手糞な鼻歌を口ずさみながら、彼は土器を――そう、土器である――を作るのにハマっていた。

海底には僅かながら藻が張り、生命が産まれるのもそう遠くないかもしれない。

ただ待つのも暇なので、彼は土器作りに手を出していた。幸い、水と土なら掃いて捨てるほどにある。

最初の頃は単純に水と土を混ぜ、泥を捏ねてそれっぽい形に整えていただけだった。

しかし、藻という可燃物が――適しているかはこの際置いておき――産まれたお陰で土器づくりの幅が広がった。

男は乾燥させた藻――海苔を想像すれば分かり易いだろう――を、それっぽく積んだ石の囲炉裏の中に放り、手製の火打ち石を取り出す。慣れた手付きで石を弾き、悪戦苦闘しながらも火を点ける。

これに大量の酸素を送り込めれば更に火力が増すのだろうが、何せ物が無さ過ぎるのだからどうしようもない。

木でも生えてくれたらなぁ、と思いながら男は火の中へ土器を放り込む。

――そんな折であった。

「んあ？」

ふと、視界に影が射した。
特別彼は気にした風もなかったが――直ぐその異常に気付く。
あまりにも暗すぎる。
その影の濃さ。雲だとしたら分厚過ぎるし、何より周囲一面を覆うその大きさは普通ではない。
何気なく男は頭上に目をやり――思わず絶句した。
上空の一面を覆う巨大な影。そのあまりの巨大さ、異様さ。真昼だというのに、一瞬夜かと勘違いしそうになる。何せソイツの底部には幾つもの光源が点灯しており、周囲の暗さも相まり、満天の星空を連想させた。ゴウンゴウンと腹に鳴り響く低い爆音はエンジン音か何かだろうか？
「ゆ――」
アンアイデンティファイドフライングオブジェクト。
「ＵＦＯだあぁぁぁぁあああぁ――――!!!!!」
男は絶叫した。
遥か頭上に扁平の円盤型した、空飛ぶ鉄の塊。即ち、未確認飛行物体が陽の光を遮り、悠然と構えているのだから。
彼は、ほとんどが無為な時間だったとは云え、永い時を生きてきている。その精神は

ちょっとやそっとじゃ動じない、筈である。
その彼を以てしても、動揺を隠せない。
いや、仕方ないか。彼が脳内に描いていた未来図は、いずれアメーバみたいな生物が産まれクラゲや貝みたいのになって魚になって――というごく常人が思い浮かべる進化の系譜だったのだ。
それがまさか、現代でも遭遇していない宇宙人との邂逅を真っ先に果たすなんて、想定外も外である。
円盤はゆっくりと高度を下げているように見える。
実際にゆっくりと下降しているのか、はたまた遠くにあるから動きが小さく見えるのかは分からない。
兎角、巨大な質量が動いた拍子に大気に乱れが生じた。
「うおっ!?」
それは暴風という形になって彼を襲い掛かる。
火は一瞬で消え、折角完成していた土器も飛ばされ、無惨な姿をあちこちに晒していた。
「いやいやいや！　何それ!?　ありえんって！　マジありえんだろ!?」
為す術もなく、ただ男は叫ぶことしか出来ない。

まさかソレに呼応した訳ではあるまい。円盤の船底部、その中心が口を開いた。
人工の夜空に突如として形成されたブラックホールに、自然と目が吸い寄せられる。
果たして、吸い寄せられるのは視線だけだろうか。
「お？　おっおっ!?」
ふと、男の周囲を淡い緑の光が包む。
何処かから光が当てられている、と云うより空間それ自体が光を放っているようだった。不思議な光景である。だが、摩訶不思議はそれに終わらず。
「えっ!?　ちょぉ――――っ!?」
ふわり。男の足が大地を離れた。
身体全体が浮き上がり、徐々に空へと吊り上げられる。
「いや待て待て待てって!!?」
まるで空中を泳ぐように手足をバタつかせ抵抗を試みるも、無駄な結果に終わった。
抵抗するという事は、彼は嫌なのだろうか？　この世界で、何時産まれるかも分からない生命を待つよりかは、どのような相手かは全く不明だが、少なくとも星間飛行を可能にする程の知能を持った何者かと遭遇する方が、幾分マシな選択肢に思えるのだが。
そも今の彼は冷静さを欠いている。そのようなロジックを組み立てられるとは到底思えなかった。

みるみる大地が離れてゆき、男は恐怖を覚える程の高さにまで吊り上げられる。
そして遂に、彼の姿は先程の開口部に吸い込まれ、消えてしまったとさ。

ファーストコンタクト　前編

その時の目覚めは、お世辞にも良いとは言い難かった。

重い瞼が自分の意志とは無関係に上がると、視線の先には目が眩む程の光源があり、開いたばかりの目は反射的に細められた。

意識は不自然に霞掛かっており、身体を動かすのも億劫である。

眩しい。冷たい。眩しい。眩しい――。

何をするでもない、呆っとしながら、何度か目をしばたかせる。徐々に光の強さにも慣れ始め、その正体の像を結んだ。

光の正体は、幾つものライトを大きな傘に一纏めした、手術に使っている様なヤツだった。

理解した瞬間、跳ね起きる。

そして物凄い勢いで首を動かし、周囲を見回す。沢山のモニターと見慣れぬ機械。見たことのないデザインの内装。切れ切れの記憶の中、そのどれを取っても当て嵌まる景色はない。強いて一番近いのを挙げるならば、病院――清潔、無機質というイメージ――だろうか。

だが、そんな珍しい数々より彼の目を引くものがあった。

「あ――」

驚き動きの固まった、女性の姿。

それを認識した瞬間、彼の心臓は跳ね、体温が上昇した気がする。

じわりと視界が滲む。会えたら、話したい事が沢山あった筈なのに、色々な事が頭に浮かんでは消え、最終的に何て馬鹿げた言葉を口にしたもんだと思う。

「に……。人間、か……？」

その言葉を皮切りに、ハッと女の時間が再び動き始める。

彼女は弾かれた様に近くのトレーへ飛び付き、注射器――おそらく、ではあるが。銃を模した見慣れない形状の――を手に取った。

遅れて男はその行動に不穏な気配を察し、寝台を飛び降りて女へ駆け寄る。

そして彼女の指が注射器を絡め構えるのと、男が女の手を取ったのはほとんど同時の事だった。

僅かながら、男の方が早かった。

「ッ――！」

その、手を掴む握力。その力強さに女は顔を顰め、思わず注射器が手から離れてしまった。

そして来るだろう衝撃に備え、彼女は身を固め目を瞑る。

「……？」

何時迄も来ない衝撃に訝しく思いつつゆっくり目を開けると、彼女にとって思い掛けない光景が目に入った。

そこには、私の手を慈しむように包み、深々と頭を下げる男の姿があった。

「あ、ありがとう……！　ありがとう！」

震える声で何事か、女には理解できない言語を口走っていた。

一瞬、理解の範疇を超えた状況に女の脳が真っ白になった。しかし直ぐに正気に戻る。

拘束が緩んだ瞬間を見計らい、女は腕を振り払い注射器を拾い上げた。

不意を突かれた男は反応が遅れた。

女が振りかぶり注射器を刺そうとすると、男は反射的に身を守るように腕を交差させた。しかし彼女は躊躇せず、その腕目掛けて注射針を突き刺し、トリガーを引く。透明なシリンダーに満たされていた、緑色の液体がみるみる減ってゆく。

その効果は顕著だった。

間を置かずに男の身体から力が抜ける。

「あっ」と女が思った時はもう遅く、男の身体がゆらりと女の側へ傾いていた。退こうと

いう試みも遅く、二人はもつれ合いながら倒れ込んだ。
天井のライトを見上げ、女は思う
――なんだコレは？
彼女の頭脳は、知能が高いと呼ばれる同族の中に於いても図抜けている。
その頭脳が、現在の状況に理解が追いつかず、混乱していた。
いや、このような状況に至るまでの流れは解る。
未開惑星で発見した原生生物が目を覚まし、襲い掛かってきた。十分な麻酔を投与していた筈なのに何故目覚めたのかなど疑問はあるが――大方耐性でもあるのだろう――、ここまではいい。
一悶着あったものの、どうにか麻酔の投与に成功した。迂闊にもこうして原生生物に圧し掛かられるなど無様を晒しているのだから、完璧な成功とは言い難いが。全く、イ
「一了や、了・／〃／〃ヨがこの場にいなくて、本当に良かった。閑話。
（それにしても重いわね……）
自身に伸し掛かる、混乱の元凶へ目をやる。
自分らと同じヒューマノイドタイプの生物。乳房が無かったり、股間に見たことのない器官が生えていたりと、幾らか我々の肉体と異なる点はあるものの、身に纏う物もなく、髪も髭も伸び放題な見た目は正に原人と呼ぶに相応しい。

だが、先の謎の言語と行動からは一定以上の知能を有している様にも思えた。
何より――。
（……何かしらね、コレ）
女は目を瞑り自身の状態をチェックする。
心臓は早鐘を打ち、顔も、僅かばかり熱を持っているように感じる。
自身の身体に現れた明確な変調、その答えを導き出せない事実に彼女は混乱していた。
そこまで考え、彼女は一つの考えに至り、その顔に焦りが浮かぶ。
（まさか――未知のウィルス……!?）
男を乗船させた際に、徹底した滅菌処理は行った。
だが、この男の異常な再生能力――メスを入れた先から傷が塞がるのだから、ちっとも調査が進まない――を考えれば有り得ない話ではない。
「～～っ！」
脱力しきった肉の塊をどかすそうと腕に力を込める。女の細腕にそれは酷な作業であったが、どうにか抜け出す事が出来た。
落ち着いて荒くなった呼吸を整える。すると不思議な事にも、先程あれだけ乱れていた脈が元に戻っていた。

「……？」

圧迫による一過性の症状だったのだろうか。

女は首をひねり、毛むくじゃらの男の顔を見やる。すると、矢張り身体が熱を帯びるのを感じた。

彼女は慌てて視線を外し、頭を振る。

（オモイカネ。バイタルチェック）

そして一人念じる。

女の耳飾りの、ライトを点灯した。

一体何のつもりなのだろうと思っていると、何処からともなく女性的な、抑揚のない機械音声が応えた。

『エレヾリゥ博士のバイタルチェックを開始。……脈拍、血圧の上昇を確認。いずれも規定値未満です』

一先ず病気を移されていない事実に、胸を撫で下ろす。

（原因は？）

『極度の緊張と推測されます。温かいココアと睡眠を推奨します』

（そう……）

圧倒的信頼を寄せる管理システムは、そのように判断したようだ。彼女自身、同様の

答えを導き出した。
だのに解せない。何かが引っ掛かる。
自分の症状とこの男に因果関係がある事は間違いない。だが、正体までは、分からないが。
その正体を詮索するより先にやるべき事がある。
彼女は耳飾りに指を添え、一言念じた。
（オモイカネ。回線を開いて）

男が意識を取り戻すと、また見知らぬ場所にいた。
何だかこんな事ばかりだな、と苦笑を形作り、クッと喉を鳴らした。
床は染み一つ無く白く、天井も壁も見当たらない。そして足元には影すら存在しておらず、宙に浮いているのかと錯覚してしまう。
ペタペタと自身の身体に手を這わせる。異常は見当たらない、生まれたままの姿だ。
これは夢か？　当然の思考が真っ先に浮かぶが、彼は経験からそれを否定した。
そして不用意に足を踏み出す。一歩先、全てが白色で塗りつぶされた世界は距離感も掴めず、床が続いているかも見た目では判断できなかったが、彼の足裏は硬質な何かを掴んだ。

そのまま真っ直ぐ、方向感覚も定かではないが、歩き続ける。
そして十歩も経たない内に、男は盛大に、頭をぶつけた。
「痛う〜〜っ」
額を押さえながら、もう一方の手を突き出すと、指先が硬質な何かに触れる。
壁だ。壁があったのだ。掌から伝わる感触からして、おそらく、床の材質と同じものだろう。床と壁とが――おそらく天井もあるのだろう――全くの同色であること。そして全体が発光でもしているのか、影が出来ない事もあり全く距離感も存在感も認識出来ない。
もしかして、閉じ込められた？　いや、もしかしなくてもそうなのか？
意識の落ちる前、記憶の糸を手繰る。久々に人間（？）と出会えた喜びのあまり、女性の手を取り――警戒されても仕方のない。
男の頬をタラリと一筋の汗が流れる。
どうすっぺなぁと頭を抱えそうになったその時である。丁度目の前にあった壁が突如として透明になり、その向こう、三つの人影がこちらを伺うように並んでいた。内一人は、先程の女性である。
その技術にも驚いたのは勿論のこと、それ以上に彼が驚いた事があった。
三人の目鼻立ちから髪の色、身体の造形まで、一寸違わず同じだったからだ。

それでも、彼が先程の女性と認識出来たのは三人それぞれの服装と、髪型が異なっていたからだ。

まず、先程の女性。プラチナブロンドの髪を三つ編みにし、白衣を纏っている。目が合うと、何故か顔を逸らされてしまった。彼女の手元には半透明のモニターが浮かんでおり、見たことのない文字が綴られている。

次にガラス壁に手をつき、こちらを興味深そうに伺っている女性。ボリュームのある髪は緩やかに波打っており、見事な肢体を浮び上がらせるピッチリとしたパイロットスーツとのようなものを着ている。

その二人の間に立っているベリーショートの女性。彼女も同様にパイロットスーツを着用しているが、更にその上から軍服、を羽織っている。見たことのないデザインの服をどうしてそう思ったのか、それは彼女のおおよそ隙の見当たらない佇まいに起因していた。

彼女らの呼称を便宜上、ロング、ウェーブ、ショートとしよう。

さて、そのショートだが。腕を組んだまま微動だにせず、決してこちらから視線を外そうとしない。少し、色の薄い鈍色した瞳からは一切の感情が読み取れず、好奇の色も、蔑む色も見られない。本当にただ、目の前で何か動いている、そう事実を淡々と視認しているだけのようだった。

皆一様に飛びきりの美人ではあるが――同じ顔なのだから当たり前だ――、その美貌もそれぞれの纏う雰囲気だけでこうまで違う印象を与えるのだから不思議なものだ。
どうしたもんかと、男は「あー」だとか「うー」だとか唸りながら考える。
その度にウェーブは指を差して笑い、ショートは眉根の皺を更に深くした。
どうするか、なんて考えつかない。どうなるか、なんて分からない。
取れる行動は限りなく少ない。それでも、自分以外の人間、異星人であろうとも友好的でなかろうとも、出会えたという事実は彼の心にとって随分な救いであり。
前ほど悪いことにはならんだろうと結論づけ、彼は思考を打ち切った。

（アレ面白いねぇ）
ガラスに顔を目一杯近づけウェーブが言う。
その視線の先には、今正に目を覚まし、自分の身体をペタペタと不思議そうに触る彼の姿があった。
ウェーブが触れているガラスは通常のガラスではない。こちらから中は見えるが、中からは見ることが出来ない。マジックミラーのようなものだが、それと違うのは特殊な電気信号を流す事で向こう側からも見えるようになるところだ。
（近づき過ぎよ、イ「一了）

そんなウェーブのハシャギっぷりにロングは溜め息を吐いた。彼女はウェーブとは対象的に、壁から距離を取っていた。そして、数値が目まぐるしく変わる、手元のホログラフモニターと眼前の男を、交互に見ている。

（心配性だねぇ、エレゞリωは。アレが何したって、どうすることも出来ないわよ。ねぇ了・／〃／〃ヨ？）

突然話を振られたショートの返答はというと、眉根の皺を深める、というものだった。

（まったく。了・／〃／〃ヨは相変わらず無口なんだから）

ウェーブは不満そうに唇を尖らせ、仲間らへの興味を失うと再び男の観察へと戻る。

（あっ！　ほらほら！　こっちに来たよ！）

その言葉に二人も視線を男へと移す。キョロキョロと忙しなく周囲を見回しながら、こちらに近付いてくる。その勢いを緩める事無く――。

ゴツン。

「アハハハハハハハ!!」

盛大に頭をぶつける男の滑稽な姿に、ウェーブは声を上げて大笑いした。

（……はしたないわよ）

（いやぁ、しょうがないじゃん？）

腹を抱えて笑うウェーブに、ロングは非難めいた視線で睨めつける。ウェーブはさし

て反省した様子もなく、目尻に浮かんだ涙を拭っている。
そんな仲間の姿が――ウェーブが騒がしいのは何時ものことなのに、何故かロングの鼻についた。
彼女らが口を開かずに意思の疎通を行っている事に気付いた者はいるだろう。
テレパシー、などというオカルトではない。れっきとした科学技術の恩恵である。三人全員が着用している耳飾りはフォーカスと呼ばれ、脳内の電気信号を解析し、管理システムたるオモイカネが解析した電気信号を他の着用者に送信しているのだ。
大層な説明をしたが、端に思考で行う携帯電話といったところだ。
（あ、いいこと思いついたわ！）
ウェーブの顔がパァっと明るくなる。対象的にロングとショートは顰めっ面になった。
何をするつもりなのか知らないが、碌な事ではないことを二人は理解していた。止めよう、とするよりもウェーブの行動は素早かった。
「オモイカネ！スクリーンオフ！」
『了解しました。スクリーンを解除します』
機械音声が響いた次の瞬間、こちら側に変化は無いが、男のいる部屋からすれば劇的な変化が訪れたことだろう。

男は驚きに背を仰け反らせる。そして彼もまた、興味深げにこちらをじいっと見ている。

ふと、男とロングの視線が絡んだ。

――まただ。

彼女は体温が高くなるのを感じた。

咄嗟に視線を逸らす。何故、そんな事をする必要がある？　自分で自分の行動の制御も効かない。こんな事は、彼女にとって初めての事であった。

何が、一体、どうして、アレは、私の心をこんなにも掻き乱すのだろうか？

――知りたい。

手元のホログラフモニターの、男の健康状態を現した忙しなく変化する数字を見ながら、女の知的欲求がむくりと鎌首をもたげた。

そう思い至るのは当然の帰結であった。何せ彼女の頭脳は生まれてこの方、理解出来ない事が無かったのだ。なればこそ、この感情の正体を掴もうとするのはごく自然なことで、そう、させる原因たる男に興味を持つのもまた、自然な事だった。

モニターから顔を上げ、ちらりと横目にアレの様子を伺う。

どうやらウンウンと唸り何事かを考え込んでいるようだ。

アレの視線がこちらに向いていない事にホッと胸を撫で下ろすと同時に、一抹の寂寥

感を覚えた。何故、そんな風に感じるのか、分からない、分からない……。
だからこそ、知る必要がある。アレの事を。もっと、もっと。知らなくてはならない。

――少し、いいかしら。
三人が部屋を退出した後、そう声を掛けたのはロングだった。
アレの目が覚めた、とロングに言われ、二人は招かれこのような物を見せられた訳だが。
一体どのような意図があってこんな真似を、とショートが訝しんでいると、ロングの先の台詞である。
アレを披露する必要性なんて、そもそも無い。それ故にショートは、これがただの前フリに過ぎず、これから切り出す話こそが本命なのだとショートは考えていた。
（アレにフォーカスを与えてみようと思うのだけど）
このような提案をロングがしてきたことは、あまりにも意外過ぎて言葉を窮したぐらいだ。
フォーカス、というのは彼女らが着用している、耳飾りを模した端末のことだ。
小型ながらも、その機能は多岐に渡る。この艦は管理システムであるオモイカネを通してほとんど全てが機能しており、フォーカスはそのオモイカネにアクセスする為に必

要な端末であった。
だからこそ、三人という少ない人員とアンドロイドらで艦を運用出来ているのだ。
ロングは遠回しに、こう言っているのだ。彼を自由にしてみないか、と。
馬鹿馬鹿しい。ロングも詰まらん冗談を言うものだと一笑に付してやろうとしたのだが、その様子は一ミリも巫山戯た箇所がなかった。
（……正気か？）
（勿論よ）
（尚更たちが悪い）
ショートは眉間の皺を更に深めた。
（いいじゃんいいじゃん！　面白そうだし！）
話し合いに乗り気では無かったウェーブが食いつく。
ショートはロングを睨めつけ、その真意を探ろうとする。
（何故そんな事を？）
（簡単よ。彼に知性があるから。なら話を聞いてみる価値があるかもしれないじゃない）
彼女が断定する根拠がどこにあるのか、ショートには分からない。ショートは更に眉を顰めた。

（あのヒューマノイドもどきがか？　とても知性があるようには見えなかったがな。仮にあるとしてだ、有意義な情報を得られるとも思わん）
（んもう、了・／〃／〃ヨはお硬いなぁ）
（感情論で艦を危険に晒せるか、バカめ）
　テーブルに伏し、ブーたれるウェーブの潰れた饅頭のような顔がむくれた。
（そもそも、原生生物との過度な接触は法律で禁止されてる。現状ですら、抵触しているとも取られかねない）
（超法規的措置を取ればいいじゃない、監察官殿？）
（それを許可する状況ではないだろう……！）
　問答はどこまで行っても平行線を辿った。いやさ、既に茶番の領域である。
　何故なら、彼女ら三人の権限は――緊急時に於いてはその限りではないが――いずれも同等である。二人が賛成に回っている現状、幾らショートが反対したところで、どちらかが反対に回らなければ結果は変わらないのだ。
　そして、提案を持ち出したロングは勿論のこと、ひたすら面白いと連呼するウェーブも、そうなる可能性はほとんど無いだろう。
　ショートにしては珍しく、疲れたように溜め息を吐いた。
（……条件がある）

彼女が掲示した条件は以下のものだ。

一つ、艦の安全の確保。これは絶対条件だ。これが認められなければ、如何なる手段を用いても提案を棄却する構えである。

一つ、対象の常時監視。アレに何が出来るとも思わないが、だからこそ何をしでかすか分からない。

一つ、緊急時に於ける対象の自由の剥奪。そのナニかがあった際に於ける対応である。無論、生死を問わずである。

要するには、一つ目の条件である、艦の安全を絶対に守れという事だ。

（妥当なところね）

ロングにしてもそれぐらいの条件は織り込み済みだったのだろう。一つ頷き間を置かず、条件を満たした提案を喋り始めた。

（その三つを満たすのは容易なことよ。フォーカスを着用させれば、その信号を拾い続けることが出来るわ。そしてオモイカネなら、常に監視することが出来るし、行動ログを遡ることも可能よ。それに緊急時ならフォーカスでアレの脳へ停止信号を発する事も出来る。それが不満なら、信号の強度でも上げて頂戴。原生生物の脳味噌を停止させるぐらい、訳ないでしょう）

それで一の条件も同時に満たせるでしょ、とロングは最後に締めるもショートは首を

横に振った。
（いいや、一つ目の条件が不十分だ）
ロングは目を見張った。ショートの強情さに。
（報告は受けているぞ。アレの再生力は。フォーカスの信号程度で止まるとも限らん）
（それじゃぁ首輪でも付けたら？　爆弾付きの）
ロングは投げやりに言った。本心からの言葉ではない。
それでアレが死ぬとは、彼女は思わなかったがそれを口にすれば、問題をほじくり返し兼ねない。彼女は敢えて情報を伏せた。
（あ、それいいね！　首輪！　ペットみたいで！）
答えたのはウェーブだった。身を乗り出し、笑顔を張り付けている。
ショートが僅かに口角を歪めた。
（そうだな。それで行こう）
冗談で言ったつもりが本気で採用され、ロングは少しばかし頭痛を覚えた。
（ま、アナタ達がそれでいいなら）
（いやぁ、楽しみだねぇ）
いつもと変わらぬ、マイペースを崩さないウェーブに、二人は呆れるばかりだった。
（ヱレゞリω。私はアレが暴れたら殺すぞ？）

（ご自由にどうぞ）

こうして、水面下では様々な思いが錯綜しつつも、話し合いは平和的に終わりを迎え、三人は解散した。

（待て――イ「一了）

ファーストコンタクト　後編

真白な部屋で何をする、されるでもなく過ごしていると突如として一角が開いた。
そして二体のヒトガタ――異様に細い関節部からは幾つものチューブが覗き、機械、なのだろうと察する――が現れ、その手には初めて見る形の銃が握られていた。
内一体が、丸まった何かを足元へ投げてきた。
拾え、という事なのだろう。
そいつを拾い上げ拡げると、びろんと繊維の四肢が垂れ下がった。記憶を手繰り、一番近い形状を思い出そうとする。嫌な例えだが、全身タイツと言うのが、尤も近い。
男はようやく自身の格好を思い出す。この部屋で過ごすのが、寒いでも熱いでもなく、あまりにも快適だったのですっかり忘れていたのだ。
銃口を向けられる。逆らえば射殺する、という意思を感じる。
そんなせっつかんでも着るわい。という気持ちを抑え、服を観察してみる。
どうやって着るのだろうか、男の不安はほんの一瞬、襟首の側が大きく開いており、そこから右足、左足を挿し込み、次に腕を入れる。ファスナーが見当たらなかったが、この大きく開いた背中はどうすんだべ、と悩んでいると、ロボットの一人が近づき服の襟

元のスイッチを押してきた。
プシュゥ。
「うおっ!?」
空気の抜ける音と共に、ブカブカだったスーツが男の体型ピッタリになる。
そうして身に着けた服は、先の女性達が着ていたものと似たデザインをしていた。
科学の素晴らしさに感動していると、背に銃口が突き付けられる。冷や水もいいところだ。
急かされるように部屋を追い出され、いや、連行と言ったほうが正しいか。前後をロボットに挟まれ――後ろのやつは常に銃口を向けている――彼に選択の自由は無かった。
「何処へ連れて行く気なんだ?」
期待はしていないが、そう問いてみる。
矢張りというか当然というか、一切の反応が無かった。表情を伺おうにも、彼らは顔がある筈の場所には、のっぺりとしたガラス面が存在するだけで、そこから情報を読み取る事も出来そうにない。
大人しく付いて行く。
暫く歩き、ふと、通路の先に大きな窓が見える。通り過ぎざま外を見て、男は感嘆の

声を漏らした。窓の向こうには永劫の宇宙が広がっており、少し視線を下げれば、巨大な青い星が存在していた。

思わず足を止めてしまうと、再度銃口が突きつけられた。おちおち観察も出来やしない。

その事に不満を漏らすも、ロボットはひたすらに任務に忠実で、彼の意見は聞き入れられなかった。仕方なく足を動かす。

また少し歩き、そしてある扉の前まで辿り突くと、ロボットは足を止めた。

入れ、という事なのだろう。

扉へ近付くと、ガションガションと。無駄に凝った仕掛けの扉のロックが外れてゆく。

開いた先の部屋には見覚えがあった。

この艦に連れられて、最初に目覚めた部屋である。という事はだ。

――いた。

中央、こちらに背を向け、イスに腰掛けた部屋の主がいた。

白衣に身を包んだ、美しいプラチナブロンドが印象的な、三つ編みの女性。女性として誰もが羨むようなプロポーション。均整の取れた、いや取れすぎた美貌は作り物めいた印象を受けたが、その印象は直ぐ様払拭される。

彼女はこちらに振り向くと、何故だか少し悩んだ素振りを見せて、最終的に困ったような笑みを向けてきた。その人間らしい笑みに、男はホッとした。

しかし、今の間は何だったのだ？

そう、男が考える間もなく、背を硬い感触で小突かれる。

急かされて部屋へ入る。と同時に女性は席を立ち、こちらへ近寄ってきた。

二つの銃口が、男の頭に狙いを付けた。

「こんにちは」

害意はない、という事を示そうとしているのだろう。努めて笑みを作ろうとしている表情は硬く、不自然さが残っている。

そして、緊張をほぐそうともしてくれているのか、掛けられた言葉の音色は穏やかだった。

彼にしても、警戒心はあれども、特別敵意を剥き出す必要もない。

その点で彼女の狙いは達成されたのかもしれない。

一つ、問題があるとするならば――。

「服が着れるか心配だったけど、問題なさそうね。いいかしら？　ちょっとアナタに試して欲しい物があるんだけど」

「あーすまん。何を言ってるんだかさっぱり分からんのだが」

言語による意思の疎通が不可能だということか。
彼女の口から紡がれる言葉は、彼の耳にも意味不明な羅列としか捉える事が出来なかった。
それは彼女にしても同様であった。
噛み合わない会話。
しかし女はさして気にした風もなく、一人でに話を進めてゆく。そして彼女はポケットから何かを取り出した。
「これを、付けて、もらえる？」
掌に収まる程の小さな端末。
それを見せ、耳に付けるような動作をする。
手渡されたソレをしげしげと眺める。薄い、人間の指でも容易に砕けそうな程薄い端末であった。試しに軽く力を込めてみるが、見た目に反して物凄く頑丈なようでビクともしなかった。女性は男の所作に少し慌てた様子で「ほら」と髪を掻き上げ耳元を見せてきた。そこには手渡されたのと同一の機械が着けられていた。
彼女に倣い、男もそれを付けてみる。女は満足そうに頷いた。
（どうかしら？）
「いや、なんとも――って、うおっ!?」

突如頭の中に声が響く。思わず男が仰け反ると、その様子がおかしく女は小さく笑った。

「これは、あんたの声か?」

(あら、意外と冷静ね)

再び頭の中で、女の声が反響した。その慣れぬ感覚に男は戸惑いを隠せない。

(ええ、そうよ。アナタに着けて貰ったソレ――フォーカスって言うんだけどね――。簡単に言えばソレを着けた者同士で思考の伝達が出来るのよ)

脳内で説明されている一方で、女の口はクスクスと笑い声が漏れている。

頭の中に響く声と見た目の差異に、男は奇妙な感覚を覚えた。

気味が悪いな……。

(いずれ慣れるわよ)

彼が思った事を、見透かしたように女は語りかけた。

まさか、と男の額に汗が流れる。

(勘がいいのね。そう、アナタの考える事は私に筒抜けなの)

――なんだと!?

とんだ欠陥製品ではないか。

(言ってくれるじゃないの。単にアナタが扱いに慣れていないからよ。現に、私の考え

ていることは読めないでしょう?）

む。言われてみれば……。

物は試しに男は強く念じてみた。目の前の女の、思考を読んでやろうとじいっと見詰め、頭の中を女でいっぱいにしてみる。

しかし頭に血が上るばかりで、全く成果は上がらない。

不意に、女の頬に朱が指し、気まずげに目を逸らされた。

ああ。こういう馬鹿げた思考も、彼女には見透かされてしまうのか。

その考えに思い至った瞬間、自分が物凄い阿呆を晒しているようで無性に恥ずかしさが込み上げてきた。

しばし気まずい沈黙が舞い降り、それを破ったのは、二人のどちらでも無かった。

（やっほー!　検査は進んでるかーい!?）

突如として頭の中に大音量が響き渡る。

それを発したのは他でもない、部屋に突撃してきたウェーブが原因だった。

男は痛む頭を抑えながら、音の強弱までも再現出来るのか、なんて場違いな事を考えていた。

（……イ「一了、もう少し静かに現れられないの）

（いやぁははは。ごめんごめん）

ロングの非難がましい目も、さしてウェーブは気にした風もない。
男は彼女らの会話の一部に「ん？」と首を捻る。そんな彼の疑問を他所に、二人は会話を続ける。
（何をしに来たのかしら？）
（え、いやぁ。エレヾリωばっかりずるいじゃない？　私もコレと遊びたくて）
人をコレ呼ばわりとは、男はカチンと来たが、その気勢は部屋の中に存在する数々のテクノロジーを見てみるみる萎んでいく。文明レベルの差を鑑みればコレ呼ばわりも、悲しいかな、納得できてしまった。
（……邪魔だけはしないでよ）
（分かってる分かってる）
男が一人消沈している最中に、二人の間でどのような遣り取りがあったのかは分からない。ただ、ロングは憔悴した表情を見せ、この短い間に何があったのか非常に気になる所だ。
ウェーブはほんほんふんふんと男の周囲をぐるりと回り、興味深げに、無遠慮な視線を容赦なく浴びせてくる。顔を合わせた最初から、彼女は興味津々だったな……。
しかし流石に居心地が悪く、一言申してやろうと口を開いた。
「おい――」

（おぉっと！　キミ何を言いたいのかは分かってるよ！　私の名前でしょ？　私はイ「一了。それでこっちがエレゞリω。よろしくねっ）
（勝手に紹介しないで頂戴）
物申そうとした瞬間、思考を被せられ言葉が中断されてしまった。
そして物凄い勢いで話を進められる。ある意味では助かるが、何となく、彼女の性格が解ってきた。
と言うか――。
（あれあれ。どうしたの？）
男の困惑を感じ取ったのだろう。というか思考が読まれるのだから、当然解ったのだろう。
彼が何に戸惑っているのか、ウェーブは解っていないようだが、ロングは直ぐに察したようだ。そして彼女は逡巡した後――。
（ごめんなさいね。改めて、私はエレゞリω。この艦では、未開惑星の調査及び開発を担当しているわ）
解るかしらね？　そう付け加え、ロング改めエレゞリωと名乗った女性は言葉を締めた。
男の眉間の皺が更に深くなった。

（うーん。やっぱり知能が低いんじゃないの）

とても失礼な評価を下された気がする。

（いえ、これは……）

ヱレゞリωは困ったような笑みを浮かべている。こっちだって困っている。

（ごめんなさい。一先ず、アナタの名前も教えてくれないかしら？）

これは、言われるまで全く失念していた。さる疑問が脳内を占めていたからといって、大分礼を逸する真似をしてしまったのではなかろうか。

「すまん。忘れてた。俺の名前は……」

イ「一了と名乗った女が好奇心に目を輝かせながら身を乗り出してくる。

ヱレゞリωも――クールな印象を男は抱いていたが――熱の篭った視線を向けてきた。

少々やり辛さを感じるが、彼は記憶の糸を手繰るのに必死だった。何億という年月の向こう、擦り切れたフィルムみたいな現代の風景を思い浮かべ、端と気付く。

「……すまん、わからん」

（って、おおいっ！　私の期待を返してよ！）

知るか。勝手にそっちが期待しただけなのだろう。

（アレ？　私の扱い非道くない？）

あぁ。彼女のあまり知的さを感じない振る舞いから、思考が読まれる、という事実を失念していた。全く、面倒くさいったらない。

（むむ！　コレ生意気なんだけどっ）

いや、俺がお前さんに気安いのは、友情を感じているからだよ、きっと。

（えっ、本当？　いやぁ、それなら嬉しいなぁ）

なんて単純。なんてチョロイン。

でへでへと照れるイ「一了を横目に、男は思考を悟られないよう頭の隅でそっと溜め息を吐いた。幸いにも、それはバレなかったようだ。

漫才を繰り広げつつ、フォーカスのコツを男が掴み始めた、そんな時である。ふと、横から不穏な気配を感じ、慌ててそちらに顔を向ける。

（……何かしら？）

「いや……、何でもない」

そこには、ただ微笑みを称えたままのヱレゞリωがいるだけ。

気の、せいか？

無意識の内に握った拳は汗に塗れ、消えた気配は矢張り、最初から無かったと考える方が自然だった。

（……）

「それで何か、分かったのか？」
（あっ。いえ、あなたの人生が想像を絶していたから）
「信じるのか？　アレを」
　確かに、思えば訳の分からない話だ。ある日目が覚めたら見知らぬ世界で独りっきりで、気の遠くなるような年月を過ごしてきたなんて。自分がそんな話を聞かされたら、相手の正気を疑うだろう。
（ええ、その方が辻褄が合うもの。アナタの、想定以上に高い知能もね）
　ヱレゞリωは真っ直ぐな瞳を向けてきた。
　辻褄が合うとは、どういう意味だろう？　彼が脳内に疑問を浮かべるだけで、察したヱレゞリωが「あぁ」と答え合わせを始めた。
（アナタの疑問――それは私達の名前が分からないことね）
（ほえ？　キミ、私達の名前も分からないの？）
　おバカだねぇ、と一人頷くイ「一了を無視し、二人は続けた。
（現在行っている思考での会話は、フォーカスを通していると説明したでしょ？　実際は直接フォーカスが遣り取りしている訳ではなくてね、一度オモイカネを介して会話をしているのよ）
　オモイカネ？　聞いたことの無い単語が出てきた。

（オモイカネというのは、私達の艦の”オモイカネ”のことよ。私やアナタのように言葉が通じない翻訳を、オモイカネが処理してくれているの。異なる言語、というのは当然その表現や意味に違いが生じるでしょう？　その差異を埋めるため、オモイカネが”オモイカネ”のデータベースに登録している単語を自動的に算出、参照し一番適切な言葉として伝えてくれるのだけど――）

「あー、すまん。説明の最中なんだが」

（何かしら？　分からないところがあった？）

気持ち良さそうに諳んじる彼女には悪いが、言葉を遮らせてもらった。

ヱレゞリωのこちらを見る目が、まるでダメな弟を優しく諭す姉の様で、背中がむず痒くなる。

俺の方が年上なのに……、多分。

「いや、大体分かる。分かるんだが、オモイカネが艦のオモイカネって言うのは何だ？」

（……成る程ね。アナタの文明では”オモイカネ”の概念が無かったのね。ごめんなさい、質問はもう少し我慢して貰える？　私達の名前と”オモイカネ”が理解出来ないのは、根っこは同じ問題だから）

そう、言われてしまっては、こちらとしても黙って聞くしかない。

ごめんなさい、とヱレゞリωは更に一度謝ってきた。

何故謝るのか。お前さんが謝る必要なんて、無いじゃないか。その旨を伝えてやるとヱレゞリωの顔が目に見えて赤くなった。それを誤魔化すように、ヱレゞリωは気持ち早口で説明を始めた。

（いいかしら？　〝オモイカネ〟のデータベースから言葉を引っ張ってくるのだけど、どちらかの文明に存在しない概念、ないし存在しない言葉。それと固有名詞なんかは上手く訳せない事があるのよ）

そこまで説明されれば、男も理解する事が出来た。

「つまりは、アンタらの名前を俺が聞き取れないのは」

（そうね。アナタ達の言語に私達の名前を正しく表現できる術――音が無いのでしょうね。名前を訳すにもいかないでしょう？）

（へぇー。そうだったんだー）

いつの間にか聴衆のポジションに付いたイ「一了が、さも解ったとばかりに腕を組み頷いている。

お前さんは知ってなきゃいけない立場じゃないのか？　そう、ツッコミたい気持ちをぐっと堪える。すると二人に思考は伝わらなかったようで、ようやく彼も、フォーカスを使いこなせてきたようだ。

（……もしかしたら、知能だけならアナタより上かもしれないわね）

（そんなことないよ――！　……そんなことないよ？）

いや、こっちに振るなよ。

男は気付かぬフリをして話を進める。

「それじゃオモイカネってのは」

（アナタ達の文明レベルでは知覚出来ない技術、或いは想像外の認識、ということになるかしら）

名前が聞き取れない問題は理解した。しかし〝オモイカネ〟の正体と云うのは、イマイチ理解しきれなかった。それこそが正しいのだろう。彼女の言葉を信じるなら、自分らの文明では理解出来ないからこそ、理解出来ないのだ。

……何だか頭が痛くなってくる。

「なぁ。ついでに聞くが、オモイカネってのは結局何なんだ？」

（そう、ね。噛み砕いて説明すると、全ての機械、機能を統括する管理システムのようなものよ）

「ふうん。マザーコンピュータってやつなんかな」

（機械の母（マザーコンピュータ）……？　面白い表現ね）

ヱレゞリωは何故だか非道く感心した様子で、――彼女らしからぬ――目を輝かせた。

その事が、やけに男には引っ掛かった。
「しっかし、アンタらの名前も分からん。自分の名前も分からんじゃ不便この上ないな」
（はいはいはーい！　私に良い考えがあります！）
どうせ碌でも無い考えだろうと二人は露骨に嫌そうな顔をした。
（失礼だね、失礼だねキミたちは。そういうのは話を聞いてからにしなさい）
「じゃぁ聞いた後蔑んでやるから、さっさと言え」
（なんだい、この下等生物は。失礼しちゃうね全く）
「はよ言え」
（ふふふ、それはねぇ――）
言葉を一旦区切り、一々勿体振ってくれる。
期待よりも、苛立ちが募った。
そして十分溜めに溜めて、イ「一了は得意気に言い放った。
（名前を付ければいいんだよ！）
（……イ「一了にしては無難な案ね）
いやほんと。これには彼も驚いた。
（私にしてはってどういうこと!?　もー、ひどいなぁ）
イ「一了は頬を膨らませているが、その表情はだらしなく崩れている。キモッ。

（で、どうどう？）
「俺は構わんよ。何だかんだで、あった方が便利には違いねぇし」
（うんうん。そうだよねぇ）
名案には違いないのだが、これがこの女の功績だと思うと、何故か悔しさが込み上げてきた。いや、あまり深く考えるのはよそう。
「それで、俺の名前はどうする？」
（ええっと。それじゃぁ、そうね。アナタの名前は――）
（クロ！　クロにしよう！）
エレゾリωが何故か、もじもじと言い淀んでいる間に、割って入ったイ「一了がクロ、という名前を提案してきた。
「何故にクロなんだ？」
（んー？　髪が黒いからだよー？）
そう、イ「一了は己の髪を弄って言った。
確かに、これまでに出会った三人は全員とも美しい銀髪だったな。
「いいんじゃね。お前さんにしては」
（一言多いんだから全く！）
クロ、クロか。今日から俺はクロという名前らしい。

口にするとこれが意外にもしっくりとくる。昔々に自分がなんと名乗っていたのか、微塵も覚えていないからこそ、なのかもしれない。

クロが新しい自分の名前を噛み締めている一方で、何故かエレゞリωが固まっていた。

「……どうしたんだ？」

（いえ……、何でもないわ。強いて言うなら自分の感性の貧弱さを嘆いている、ってとこかしら……）

目に見えて落ち込むエレゞリω。何でもない、という事はないだろう。

何と声を掛けようかと悩み、もう一度エレゞリωの言葉を反芻して

「まさか同じ――」

（止めて！　それ以上は止めて！　ええ、ええ。私だって、ちょっと安直過ぎるかもとは思ってたけど、だからって……！）

そういう事だったか。特別、気にすることでも無い気がするが、彼女にとっては随分とショックな事実だったらしい。

（それじゃぁ今度はクロの番だね！）

「は？」

（は、じゃないよー。クロが言ったんでしょ。名前が無いと不便だって）

いや、だからクロって名前を付けたばかりじゃん？
（ノンノン、違うよー。クロが、私達に、名前を付ける番ってことだよ）
「……訳分からんがな」
（分からない訳ないでしょ？　だって、クロは私達の名前が分からないんだから）
「……分かるし」
嘘です。分かりません。強がりました。
っていうか名前を付けるなんて、面倒事はごめんである。
そういった保身の為に吐く嘘というのは、得てして己が身に戻ってくるのだ。そう、瞬く間に。
（じゃぁ呼んでみてよ。イ「ー了って）
とてもいい笑顔で、彼女は言った。
畜生！　罠だったか！　こっちも面倒臭ぇ！
（どうしたのークロ？　早く呼んでよ。分かるんでしょ？）
じりじりと退路を絶たれ、男は額に大量の脂汗を浮かべた。そしてどうにかこうにか、蚊の鳴くような声を、喉から絞り出した。
「イ――イルンァ……？」
（ぶっぶー。不正解ー）

違う名前を呼ばれたと云うのに、イ「一了はご機嫌である。

しかし参った。確かに不便だと言ったのは自分だ。その自分が、彼女らの名前が解らないなんてのはとんだ笑い話である。

「あー。まぁ呼べるよう努力するから。一々名前を付けるなんて――」

そうは問屋がおろし大根。男の災難は続く。

さっさと話を切り上げてしまおう。そういった見え透いた魂胆は、大抵上手くいかないんだって、さっきも口を酸っぱくして言っただろうに。

突然、クロは腕を捕まれた。何事か、と掴んだ主に目をやると、そこには思い詰めた様子のヱレゞリωがいた。

まさかという疑心と、ヱレゞリωならばという信心が半々に、男の中でせめぎ合っていた。

彼女は意を決したように口を開いた。

（ヱレゞリωって呼んで）

「え」

（呼んで）

やけに真剣な様子で詰め寄られ、男はたじろぐ。

掴まれた腕も、所詮女の腕力である。振り払う事は容易だが、それを実行した時、ヱ

レゞリωがどれだけ傷つくか。そう、考えれば選べぬ選択肢である。
これは……断れそうもない、な……。
男は観念する他なかった。
「エ――エレヴリん……？」
そう、耳に聞こえた音を素直に口に出してみる。
どうせこれも間違っているのだろうが、ヱレゞリωの顔が花笑んだ。
これは、もしかして奇跡的にあってたのか……!?
（ぶっぶー。全然違いますー）
何故かイ「一了が答える。男の肩ががっくし落ちた。
（これはね、やはりね、名前を付ける流れだね）
（ええそうね。名前を呼べないなんて、由々しき事態だわ）
いつの間にやらヱレゞリωも与し、二体一の構図となっている。
何がどうしても、名前を付けさせたいらしい。
クロは頭を抱えた。何故に子供にすら名前を付けたことのない自分が、成人女性の名前を付けにゃならんのだ。それも二人も。
嘆くだけでは自体は好転しない。いや、悪化の一途である。
既に二人の中では決定事項なようで。

（ん～。可愛い名前だといいなぁ）

（……）

イ「了は目に見えて浮かれ、ヱレゞリωも声にこそ出さないが期待の目を向けてきている。

クロは悩んだ、それはもう、頭から湯気が出るんではないか心配になるぐらいに悩んだ。

下手な名前を付けようものなら、一生恨まれるだろう。名前とは、本来それほどに重要なものなのだ。

男は度胸である。クロも遂に覚悟を決め――。

「文句言うなよ？」

寸前にヘタれた。情けない、と彼を責めるのは些か酷というものだろう。

しかし同情の余地はあれど、情けないことには変わりあるまい。

今度こそ彼は、覚悟を以て口を開いた。

「イリアと、エイリン――でどうだ？」

遂に言った。散々悩み抜いた名前を、それぞれを名指して言う。

彼女らの反応は極端なものだった。

（ふぅん。イリア、イリアかー。えへへー、いいじゃん）

（エイリン、ね……）

気に入って、もらえたのか……？

一先ず男は無難に乗り越えたことに、胸を撫で下ろした。

イリアは喜びを目に見える形で現してくれるから助かるが、エイリンは静かに呟くに終わり、彼女がどう思っているのかイマイチ測りかねる。多分、嫌ということはないと思うんだが、そう思うのも自分の、希望的観測に過ぎない。

緊張から開放されたばかりのクロは、気が散漫となっており気付かなかったようだ。

普段から冷静さを崩さない彼女の頬が、ほんのりピンク色に染まっている事に。その口元が、嬉しそうに綻んでいる事に。

（よーし！　そいじゃ最後にもちょっと顔を綺麗にしようかーー！）

唐突にイリアがんな事宣言した。

突然の出来事にクロは「は？」と無様な反応をする事しか出来ないが、エイリンは分かっているのだろうか。カチャカチャと、戸棚を漁っている。

「おい待て。何するつもりだ」

クロの脳裏に嫌な光景が浮かぶ。己の顔面にメスを入れられ、好き勝手に形を変えられる光景が。

（んー？　何ってちょいとそのもじゃもじゃ頭を整えるだけだよ）

「ん、ああ。そういう事ね……」

何故先の一瞬、B級映画めいた光景を思い浮かべたのか。彼女らの信頼を裏切るような行為でクロは自らを恥じた。

（ええ、あったわよ）

エイリンの手には薄茶色した瓶が握られていた。

「それは？」

（脱毛クリームよ。これを塗れば立ちどころに毛が抜け、永遠に生えてくることは無いわ）

「え、いや」

何それ。最後にとても不穏な台詞を聞いた気がする。

――永遠に生えない。

ある意味では死刑宣告にも等しい言葉ではなかろうか。

髭は、髭はいい。上手く塗ってくれれば永遠に髭剃という面倒な作業から解放されるのだから。だが、万一手が滑って、クリームが頭にでも付着してしまったら？

クロの顔から血の気が引いてゆく。

その様子を、エイリンはおかしそうに笑い、イリアは不思議そうに見詰めていた。

（大丈夫よクロ。ちゃんと毛生え薬もあるから）

は？　今なんと――？

（ほら、これだよー。すっごいんだよコレ！）

イリアがもう一つ、瓶を見せびらかしてきた。見た目は先程のものと変わらないが、イリアが蓋を開け、中身を一掬いする。そして指の腹である程度擦り合わせ「ほら」とその面を見せてきた。

うおおぉぉぉぉぉぉっ!!　すっっげえええええええええ――――!!!!

その効果は覿面で、イリアの白い指先にはフサフサの毛が生えていた。

こ、これは！　人類が求めて止まなかった理想の極地、その一つではないか!!

（ど、どうしたのクロ？）

感動に打ち震えているクロに、二人は心配そうな視線を向ける。だが彼からの反応はない。ひたすらに感動するのに忙しかったのだ。

（……今のうちに処理しちゃいましょう）

（そ、そうだね）

美女二人がクリームを手に取り、顔塗り塗りしてもらうなんて、何て羨ましからんのだろう。時折「あっ」とイリアが声を発しては眉毛を削ぎ落とし、エイリンが気まずそうに無言で毛生え薬を塗り直したりしていた。

（クロ！　クロったら！）

「――んあ？　な、なんだ？」
（もー、何だじゃないよー。終わったよ）
「へ」
　言われて自分の顔を触れてみる。ツルリとした触感が返ってきた。
「いつの間に……」
（いやぁ、良い面構えになったよ。ね、エイリン？）
（……）
（エイリン？　エイリーン？）
　人仕事を終え満足げなイリア。エイリンに同意を求めるも彼女からの返事がない。何度呼んでもそれは変わらず、彼女の視線はひたすらじいっと、さっぱりとしたクロの顔に注がれていた。
（いやぁ、それにしても。あのもじゃもじゃからこんな立派な顔が出て来るなんてねぇ。ホント君、ヒューマノイドだったんだねぇ）
　うんうんと頷くイリア。
「何だよ。疑ってたのか？」
（そりゃぁ、だってねぇ？　酷い姿だったよ。毛ボーボーで、正に原人って感じ）
　そこまで言われる、一刻前の自分がどんな姿だったのか非常に気になってくる。一度

ぐらいでいいから、鏡でも見ておけば良かった。
（お。見れるよ？　艦内の事なら、オモイカネが四六時中録画してるから）
「ずっと撮られてるのか？」
（そだよー）
「……ストレスたまらないか？」
（ううん。全然。なんで？）
平然と返すイリアを見てクロは思った。
同じ外観をしていても、中身がそうとは限らない。彼女らとは矢張り、根本的な部分で異なるのだと改めて実感した。
（もー。エイリンも、そろそろ戻ってきなよ）
（あ。え、何？　どうかしたのかしら？）
エイリンの目の前で二度、掌を叩くと、彼女はようやく気付いたようで周囲をキョロキョロと見回す。その頬は僅かながら赤く、少々の興奮状態を現している。
エイリンらしからその反応にイリアは苦笑し、また脳の隅で気取られぬよう密かに思う。
（ふうん。了・／〝／〝ヨの杞憂かと思ったけど、これは案外アタリかもねぇ……）
彼女が、ここに赴いたのには確たる理由があった。

（待て――イ「一了）
（ん～？　なぁに了・／〃／〃ヨ）
エイリンの提案が可決された、三人が別れた直ぐ後のだ。
イリアは了・／〃／〃ヨに呼び止められた。
（オマエに頼みたい事がある）
（了・／〃／〃ヨが？　珍しいねぇ。いいよ、何でも言ってよ）
いとも容易く安請け合いするイリアに、了・／〃／〃ヨは一言注意しようかと思ったが、今回ばかりは都合が良いので、止めた。
（オマエに監視役を買ってもらいたい）
（んんー？）
了・／〃／〃ヨの言葉に、イリアは首を捻る。
（フォーカスで監視する、って話じゃなかったっけ？）
（違う。ヱレゞリωをだ）
今度こそ、イリアの頭に一杯の疑問符が浮かんだ。
何故にヱレゞリωを？
その疑問に答えず、了・／〃／〃ヨは静かに問い掛けた。
（オマエは感じなかったか？　アイツの違和感に）

（ううーん……）

そんな事を言われても。イリアはあまり頭を使うのが得意ではなかった。それで危うく失敗作として破棄されそうにもなったのだが、その代わりだろうか、身体能力が他の個体に比べ格段に優れていた。

同じ戦闘用として調整された、目の前の了・／〝　／〝ヨと比べても、その点だけはイリアが優れていた。

おかげで破棄される未来を免れたのも、昔の話である。

答えが分からぬイリアに、特に落胆した様子もなく了・／〝　／〝ヨは説明した。

（いいか？　私達はアレのお披露目だと言われたが、そんな事をする必要がどこにある？　となるとだ、ヱレゞリωの目的は別にある。なんだ？）

（ええっと）

問答の形で話を進めてくる。

イリアとしては、一息に正解を言ってくれた方が楽だと思うのに。了・／〝　／〝ヨの悪い癖だ、と彼女は思った。

（アレを見せられた後、私達は何を相談した？）

あっ、とイリアが小さく声を挙げた。

（もしかした、フォーカスを着けさせる為？）

了・／〃／〃ヨがニヤリと笑った。猛獣のような笑みだ。
（あぁ、そうだ。では一体どんな思惑があってそんな事をする？　イ「一了にはそれを調べて欲しい）
（でも天才エレゞリωだよ？　裏があるにしても、私達の不利益になるような真似はしないでしょ？）
予想に反して、了・／〃／〃ヨは苦々しく唇を噛んだ。
まるで、それこそが話の本質だと言わんばかりに。
（……分かったよ。やるって言ったしね）
（……助かる）
（そいじゃま、ちょいと時間を潰して適当に突撃しますかー！）
少しわざとらしかったろうか？
そんなこと、了・／〃／〃ヨも解っているだろう。話を合わせて深く突っ込むような野暮はしなかった。
じゃぁね、と行こうとしたイリアの脳裏に、ふと、一つの疑問が浮かんだ。
（そういえば、どうして了・／〃／〃ヨがやらないの？）
（オマエの方が適しているからな。私はイ「一了のように、自然には振る舞えんよ）
（んんー？　それって褒めてるの？）

ふっと、本当に珍しいことに、了・／〝／〝ヨが柔らかく微笑んだ。
（当たり前だろう。オマエの一番いいところだ）
（え、いやぁそう？　えへへー）
全く了・／〝／〝ヨは人を使うのが上手いんだから。
そう残して、イリアは去っていった。向かった先は、おそらくエイリンの部屋だろう。
その背を見送り了・／〝／〝ヨは、思い出していた。先人達の教えを。
感情は、判断を鈍らせるだけの余分なものに過ぎない。極力排除すべし、という教えを。
だからこそ、私は、いや私達は多くの感情を廃してきたのだし、余計な感情の多いイリアは失敗作なのだとされた。
――果たしてそれは、本当に正しいのだろうか？
こんな事、考えているだけでも反逆罪ものだ。だが、イリアと近くで接していると、時折、目を背けたくなる衝動に駆られる。エイリンを見ていると、チクリと胸を刺す感覚に襲われる。
これは、いけない。こんなものは、感情は、私には不要なのだから。
強く、奥歯を噛み締め、思考を無理矢理切り替える。
（さて。私は私のすべき事をするか――）

自室へと戻り、まずは報告書の作成。それが終われば、この星のコロニー化を本格的に進める事になる。基地の設営、アンドロイド分隊の編成、生態系の作成。やる事は山積みなのだから。

テラフォーミング　前編

エイリンの検査は翌日も続いた。よく解らん機械で徹底的に身体を弄り回された。お婿に行けなくなっちゃう。

驚くべきことに彼女らの種族には男が存在していないようで、性器を触られて「これは何？」と聞かれた時には色んな意味で慌てた。ほら、反応しそうになるとか。……いや、既にちょっと反応してしまった。くやしい。

言い訳をするならば、まぁ反動でしょう溜まっていたのでしょう。それこそ桁違いの孤独を味わってからの、美人が性器に触れてくるんだぜ？　我慢しろと云うのは無理でしょうよ。

手袋越しに感じるエイリンの体温は暖かく、ムクリと欲望が鎌首をもたげた。その時の彼女の反応ったら、驚き三割興奮六割、残り若干の恐怖、と云った風に鼻息も荒く、彼女の瞳の奥に狂気を垣間見た。

このまま彼女の興味が男性器に向きっぱなしになりでもしたら、サンプルとして切除されかねん。そんな危惧を抱いた俺はエイリンの気を逸らすべく話し掛けた。

一体それで、どのように種を維持しているのか？　返答は大方予想通り、彼女らは試

験管ベイビーだそうな。更に言うと三人は同じ遺伝子から作られたと言う、閑話。

大まかな検査が終わった今はもっぱら問診の時間だった。と言うか、既に問診という名の雑談と化している気がしないでもない。

と言うのも応答の最中、エイリンは言葉と翻訳の差異がある都度、それはどういう意味かと根掘り葉掘り聞いてきて、そこから話が脱線してゆく。クロはどういう生活を送っていたのだとか、どんな文化が存在していたか、などである。

あんまりにもエイリンが聞き上手なもんだから、クロもつい、話に熱が入ってしまう。古い古い記憶を手繰り、彼女が喜びそうな話をする。エイリンはその一言一言に、興味深そうに耳を傾けては、事細かに記録として残している。

それで遣り取りは、クロにも大変有用であった。

彼女らの文明はクロが過ごしていた世界と比べて遥か雲上のレベルだが、それ故にと言うべきか、クロの記憶の中には、彼女らが失って久しい文化も数多く存在していた。

――その一つが娯楽である。

この艦にも娯楽は全く無い、という訳ではない。カードゲームや戦闘のシミュレータなど、あるにはあるものの、その数は少ない。

クロからエイリンに、何故そんなにも娯楽が無いのか聞いた事がある。彼女の返答は、必要ないから、という一言でバッサリと切り捨てられてしまった。

まぁ星間飛行すら可能とする文明である。その精神性は常人たるクロの遥か上にあるのだろうが、それにしてもクロから話を聞き出すエイリンの姿は、娯楽に飢えた女学生のようにも見えた。

では、悠久の暇を何して過ごしているのかと聞けば、大半がコールドスリープしているのだという。目的地を設定すれば後はオモイカネが自動的に最適なルートを航行してくれる。その間、人の手は全く、必要ないそうな。

それを聞いてクロは、ゾッとした。全てを機械に任せるということに、恐怖を覚えないのか？

エイリンはクスクスと笑った。

「おかしなことを言うのね、クロは。オモイカネはそんなヘマはしないわよ」

……彼女らの科学技術が何処まで達しているのか、クロは知らない。知らないからこそ、オモイカネを信用出来ず、不安を抱くのかもしれない。

しかし彼女らの盲信と言うか、ある種の危機感の薄さは、クロの胸に深々と棘として残った。

「ねえ。どうしてそんな風に思うの？」

エイリンらの文化に失われ、クロには有るもの。そのもう一つにコレがあった。

――感情である。

おかしな話だと思う。犬猫にすら――植物も見ようによっては――感情があると云うのに、自分より遥かに優れている彼女らには感情が無いと云うのだから。

いや、厳密に言えばエイリン達にも感情はある。イリアが良い例だろう。あれ程感情豊かな人間は、そうそうおるまいて。

言葉の選択が悪かったろうか？　彼女らに無いのは感情そのものではなく、感情を表現する言葉が少なかった。クロでさえ異様を感じ取る程に、である。

根源的な感情、喜怒哀楽は現せても、微細な違いの感情を表現する術を持たない。これもまた、エイリンから言わせれば必要ないと断じられてしまうのかもしれない。

それにしてはエイリンの興味は、文化が不要と廃した筈の感情にこそ、興味が偏重している気がする。

「ねぇ、どうして？」

返答の無いクロに再び問うエイリン。

その声に現実へと引き戻される。

「あ、あぁ。俺がいた世界じゃぁ、人の使う機械が暴走する、なんて創作が山ほどあってな」

「そう……。そんなお話があったのなら、この目で見てみたかったわね」

「んだなー。実物があったら説明も楽なのにな」

「……そう、かもしれないけど。私はアナタの口から聞きたいのよ」
「んん～？」
彼女とは既に、フォーカスを介しての遣り取りは行っていない。
エイリン曰く、「医者と患者は信頼を築くのが大事なのでしょう？　なら、アナタの使い慣れた言語を使った方が、距離を縮めるにはベターだと思わない？」だそうな。その為に彼女は、わざわざクロの使う言語――つまりは日本語だが――を覚えたのだから、天才の考える事は解らん。いやホントに。
言葉を介さずとも、高度なコミュニケーションが取れるのに、何を好き好んで、わざわざ原始的なコミュニケーションを行おうとするのか。それしか手段がない、というなら解る。だが、クロは十分にフォーカスを使いこなしており、念話も既に可能である。
だのにエイリンは、口語での遣り取りに拘った。彼女らの文化が切り捨てた無駄なモノの一つだと云うのに。
俺の口から聞きたいという、エイリンの真意が分からず首を捻る。凡夫たるクロには、やはりエイリンの考えは分からなかった。
不意に、会話が途切れ、沈黙が舞い降りた。先に口を開いたのはエイリンだった。
「……ねぇ。あの、手を握る、という行為にはどんな意味があるの？」
「手を……？」

「もうっ。昨日だって帰り際、私とイリアに手を握るよう求めてきたじゃない？　アレは何の意味があるの？」
　まさかそんな事を聞かれるとは思わず、クロは一瞬考える。
「あー、ありゃただの握手だよ。何っつーのかね、親愛や友好を現す手段っていうか」
「……親愛って何？」
　まるで禅問答だ。
　俺はそりゃまぁ、永く生きてはいるがそれだけである。生き字引と呼ぶには、些か異なるだろう。だから、哲学に片足突っ込んでる質問には即答出来ずに、ついと考え込んで間を作ってしまう。
「あー……。友好は解るんだよな？」
「ええ。双方の円滑な或いは同盟関係を維持する必要な感情の一つね」
　彼女の理解は一々お硬い。まるで辞書と話している気分に陥る。
「その友好をレベルアップしていくと、親愛になる、感じ？」
　口にしてから友好の上は友愛？　いや、親愛の下が友愛？　とか今更思う。
　何か違う気がするがどうか許して欲しい。俺だっていっぱいいっぱいなんだよ！
「……ねぇ。それじゃぁ、親愛の、一番上には何があるの？」
「へ？」

「教えて――」
真剣な様子で――そも真剣でない時がないが――、詰め寄ってくるエイリン。
「あー、いや。何だろうな。単純に愛なんじゃね？」
知らんけど。
真剣なエイリンには悪いが段々と、返答が投げやり気味になる。それも仕方ない。宇宙船の中じゃ朝だ夜だの概念は無いが、時間は確実に過ぎているのだ。どれだけの時間、質問攻めにあっているのかは解らないが、クロは体感で半日以上質問攻めにあっているように感じていた。
体力的にではなく、精神的には強い疲労感を感じていた。
エイリンは美人だ、まず間違いなく。そんな彼女に詰め寄られているのも、疲労に拍車を掛けている原因でもあった。
いい加減なことを軽く口にして、後悔する。エイリンが何と返してくるのか、察しがついて。
「じゃぁ、愛って何？」
ほらきた。
愛が何かなんて聞かれて、即答出来る人間がどれだけいる？
というか愛なんて漠然とし過ぎた表現ではあるまいか。先の友愛や親愛だって、大別

すれば愛に含まれるだろうし。愛という大きな枠組みがあって、そこから色々と博愛だとか派生しているのではなかろうか。

愛とはとどのつまり、好意全般を含むもの。

しかし、エイリンが聞きたい意味とは、多分こんなんじゃない。

「ううーん……」

今度こそクロは言葉に窮した。

頭の隅で、何故に俺がこんな事を考えにゃならんのだと訴える自分を排除し、没頭する。

というか、だ。

「頭の中を読んでくれりゃ楽なのになぁ」

なんて零したのをエイリンは気に入らなかったようだ。

「アナタが、フォーカスの扱いに慣れたせいで読めないのよ、もう」

子供のように拗ねて言う、何というか、意外な彼女の一面を見た気がする。

「ねえ、誤魔化さないで。愛とはどういう感情なの？　アナタの言う、親愛よりも上があるのだと言うなら、興味があるわ」

「……すまん。俺にも、よー分からん」

クロは逃げた。一方で、紛れもない本心でもあった。

そんな彼の様子を察したのだろう。エイリンはこれ以上の追求を諦めたようだった。
「……そう。アナタがそう言うなら、今はいいわ」
今は、という事は、また改めて聞かれるんだろうか。嫌だなぁ、なんてクロが考えていると突如として招かれざる客が乱入してきた。
（やぁやぁクロ！　元気してたかい？）
入ってきた人物も騒がしいシチュエーションも、前と全く変わりない。
「あのなぁ、昨日の今日でどう体調を崩せっちゅうんじゃい」
呆れてクロが答えると、イリアはよく解っていないのか首を傾げた。いや、お前が振った話題だろうと。
「……それで、何の用かしら？」
何故だか機嫌の悪くなったエイリンがイリアを睨みつける。
（おぉ？　エイリン、何で喋ってるの？）
「……私の勝手でしょう。そんな事より、要件を言って」
（んー、まぁいっか。そうそう、要件はねー、これこれ。これだよー）
そう言ってイリアが取り出したのは小さな、金属製の輪っかだった。
鋳物のように継ぎ目の一切見当たらないソレは、表面は白くツルリとしており、一見して宇宙船の材質と同じようにも見える。実際はどうなのかクロには検討もつかない

が、兎角、見た目だけなら美しいリングだった。
（ハイこれ。クロにプレゼント）
僅かにエイリンの眉が跳ねた。
イリアがクロに、笑顔で金属製の輪――昨日に話した信管付きの首輪――を差し出した時、エイリンは明確に己の中で不快感が生じたのを感じた。ただ、何故そのような感覚を抱いたのか彼女自まるで身解らず、誤魔化すように深い皺を刻んだ眉根を揉み解した。
「何ぞコレ？」
（何って、首輪だよ。クロには分からないのかな？　それじゃ、着けてあげるよー）
如何なる原理かは不明だが、リングの一部がポカリと開いた。言って彼女がソイツを首に着けようとしてくる。
（……何で避けるの？）
「いや、なんとなく？」
（なんとなくで避けないでよ、もー）
首輪という響きが嫌なのだろうか、或いはチョーカーと言われていたらこの嫌悪感も薄らいだのか。イリアが首輪を装着しようとしてくる度、クロはそれを避け続けた。
スッ――。サッ――。

ススッ――。サッ、サササッ――。
（……）
「……」
二人の間に、他の者には見えぬだろう火花が散っていた。
間合いを測り機を伺うイリア。スーツに包まれた彼女のしなやかな肉体は、さながら獲物を仕留めんとする肉食獣を連想させた。
対してクロは、その機を見極めんと腰を落とし注意深く観察している。
この下らぬ茶番は何時迄続くのだろう、と見兼ねたエイリンが口を挟む。
――人の部屋で何をしているのだ、と。
その言葉にクロの意識がほんの僅かに逸れた。
（ッ！　隙ありぃ！）
その一瞬を見逃すほど、イリアは甘くない。二人の影が交差した後、クロの首にはがっちりとリングが嵌められていた。その、窮屈でも緩くもないリングに指を掛け力を入れるも、あつらえたかのようにピッタリと、指一本の隙間もなく嵌っている。
「ぐぇぇぇ！　取れん！」
（うんうん。似合ってるよー）
イリアは己の仕事の出来栄えに満足している。コイツでは話にならんと、エイリンに

視線で助けを求めるも、彼女は困ったように微笑むだけだった。

「ごめんなさいねクロ。了・／、／〃ヨがどうしてもって」

エイリンの口から知らない名前が出てきた。クロは消去法で軍服を羽織った女の姿を思い浮かべる。

しかしどうにも、話の前後が繋がらずに首を傾げていると、イリアが文字通りの爆弾発言をした。

（その首輪には爆弾が着けられてるんだよー！　クロがおかしな真似をしたらボカーンだからね！）

イリアはケタケタと声を出して笑っているが、当事者からすれば笑い話ではない。冗談だろ――そう、願ってエイリンに目を向けると、彼女は何とも言えない表情を浮かべるだけで無言を貫いた。

……あぁ、そうか。

クロからすれば窮地を救い出してくれた恩人である。恩人には違いないが、彼女らは――見た目は同じでも――根本的に違う生物なのだと、本当の意味で理解した。

百年の恋も冷める、と云う言葉があろう。勿論クロは、彼女らに色恋の感情を抱いていた訳ではないが、これから先、彼女らに一歩踏み出す可能性は潰えた瞬間であった。エイリンが己の心を自覚しないうちに、ソレは静かに終わりを告げた。

「ねぇ。最後の質問なのだけど、クロは何か不満を感じていないかしら？　私が出来る範囲で口添えてあげるわよ？」
その問いに、クロは遂に念願の時が来たのだと悟った。長々続いていた問診がようやく終わりを迎えることへの歓喜？　いいや――。
「――い」
助けられた身で、図々しい願いだとは百も承知。だがこればっかりは、言わずにはいられなかった。
クロの言葉を聞き取れず、エイリンもイリアも首を傾げた。
「メシがマズイ！　マズイんだよおぉぉぉぉ!!」
クロは吠えた。ありったけに吠えた。
出された食事は、ドロドロとした少し茶けた色の流動食だった。マズイ、と云うのは言い過ぎかもしれない。だが断じて、美味いものではなかった。
というか無味だった、無臭だった。だがエイリンが云うにはコレ一杯で一日の活動に必要な栄養を摂取出来る、完全栄養食だという。
確かに、皿一杯分の量で不思議と腹も膨れたのだが、心は満たされなかった。
だが彼の魂の慟哭は女性らに伝わらず、エイリンもイリアも、揃って首を傾げる以上

の事はなかった。

まさか――。クロの背筋に冷たい物が奔った。

次なるイリアの台詞は、クロを絶望に叩き落とすには十分な破壊力を秘めていた。

（ねぇクロ？　マズイって何？）

……ＨＡＨＡＨＡ！　ナイス宇宙人ジョークデスネー！

つい似非外人じみた反応をしてしまうぐらいには、クロには信じ難い現実だった。

ってマジかよ!?　味の概念が無いのか!?

試しに他の、甘い、苦いなどの味を聞いてみても知らないの一辺倒だった。

「マジかー……」

自分らより遥かに優れた科学文明を持つ種族が、味覚を無駄なモノと切り捨てているとは夢にも思わなかった。

思えば、問診時からその兆しはあった。娯楽や感情すら無駄とし効率第一主義の文明が、食事を楽しむなんて真似をする筈が無かったのだ。

「マジかー……」

あまりの衝撃に二度呟いてしまう。その目は遠く、過去の憧憬を見ているようだった。

それに興味を抱いたのは、当然エイリンだ。

「クロ？　どういうことなの？」

さりとてクロは何と表現したものか、言葉に詰まった。

味覚とは感覚である。それをどの様にして、解らない相手に言葉だけで伝えられようか？　そこまで考えて、クロはハッとした。

……俺が作りゃいいんじゃね？

彼は料理を専業としている職では無かった。だが、味を解せぬ彼女らよりかは万倍マシであろう。

百聞は一見に如かず。説明する手間も省けるし、何よりまともな食べ物にありつける。

クロは期待を込めてエイリンに尋ねた。更なる絶望に叩き落されるとも知らずに。

「なぁエイリン。この船にはどんな食料があるんだ？」

「食料って……。昨日クロに出したモノ以外には無いけど」

「ンンン!?　ノオォォォォォォ――――!!」

クロのバラ色の未来は早くも閉ざされた。

絶望のあまり床に突っ伏すクロ。

彼が気落ちする理由が解らず、宇宙人たちは互いに顔を見合わせた。理由は解らずとも、只事ではない事は察する事が出来たので、彼に声を掛けるのが戸惑われたのだ。

「あんまり、あんまりだろちくしょぉ……」
（げ、元気だしてよクロ！）
「え、ええ。アナタが食事に関して不満を抱いているのは分かったから。……その、どうすればいいのか解らないけど」
エイリンが小さく零した余計な呟きは、クロを更なる絶望の淵へと追いやった。
感情に乏しい彼女らにすら、目に見えるほどの負の感情。
その原因に対しての無理解故に、解決策を導き出せずにいた。
（うーん、うーん。……そうだ！）
イリアがパッと表情を明るくした。普段のエイリンであれば、面倒な事を思いついたのだろうと厄介にしか感じなかったろうが、今は藁にも縋る思いでイリアに託す。
（ねぇねぇクロ！　シミュレータに興味無いっ!?）
ピクリと、男の肩が跳ねた。
その反応に手応えを感じたイリアは畳み掛けるように言葉を続ける。
（うんうん。戦闘機の動きを再現したヤツなんだけどね、良かったらやってみない？）
イリアの説得の傍ら、エイリンは規則を思い出していた。
……特に部外者にやらせてはいけない、という項目も無かったので問題無かろう。というか、そのような自体を想定して無かったのだろうが。

兎角、これでクロの気が晴れるなら是非もない。エイリンは事の顛末を見守った。
戦闘機、シミュレータ。何とも男心をくすぐる言葉ではあるまいか。
昔であれば空想の産物でしか無かったそれが、触れるとなってはクロの興味を惹かない訳が無かった。
「……やる」
（うん。それじゃぁ早速やりに行こうかー！）
完璧に気が紛れた様子では無いものの、クロはイリアの誘いに乗った。
（早く早く！）
ノロノロと動きの遅いクロ。見兼ねたイリアは彼の背を押した。
その細腕からは想像のつかぬ怪力に、クロは為す術無く部屋を追い出されてしまう。
部屋を退出する二人を見守り、エイリンはようやく深く息を吐けた。

（オモイカネ。モニター対象クロ）
『了解しました。個体名クロのモニターをオン』
我が忠実なる制御システムは、指示をその通りに実行する。エイリンの眼前に艦内を映したモニターが宙に現れた。
その画面はクロを中心に沿えた場面が映っている。場所は、エイリンの部屋の前だ。

当たり前か。ついさっき、イリアに連れられて出ていったばかりなのだから。
エイリンの耳にザザァっと、ほとんどノイズの音が拾われる。モニターのクロの立つ部分に指を添え、ピンチアウトすると画面がズームされた。それにつれ、鮮明な音を拾うようになった。
やろうと思えば皺の数どころか毛穴までバッチリ見えるぐらいズーム出来るが、その必要は――クロのことなら何でも知りたいと思うが――今はない。丁度彼とイリアがモニターの半分を占拠するぐらいの大きさで止めておく。
「――おい。あんま押すなよ」
クロはぶっきらぼうに言い放つが、言葉ほど彼は嫌がっていない事をエイリンは知っていた。
イリアに反省した様子は見られず、笑っているようだ。ようだ――というのも、フォーカスの遣り取りは映像で拾えないから、イリアの反応から会話の内容を推察する他無かった。
その光景を目にし、エイリンの胸中には複雑な感情が渦巻いていた。
クロを観察出来ているという事実。
クロの横に自分以外の人物がいる事実。
その二つがせめぎ合い――という事はこれらは相反する感情なのかしら?――、エイ

リンは何とも言えぬ表情を浮かべる。その感情を正体を突き止めようとするも、結局の所彼女らはその感情を表現する術が無かった。

ただ、クロを見ていると動悸が早まる。彼がいないとつい、いる筈もないのに視線を彷徨せてしまう。冷静になって考えれば、こうしていつ如何なる時でも監視出来るというのに、ふとした拍子に視線は彼の姿を求めているようだ。

クロの言葉を耳にすると、脳の処理能力が低下する。まるで霞が掛かったように地に足が着いていないような、ふわりふわりとした感覚に陥る。正常な判断を下す事すら困難で、変なことを口走っていないか、彼が去った後、逐一チェックし直しているぐらいだ。幸いとも言うべきか、録画の中の自分は、幾度からしくない行動をしているが未だ決定的なミスを犯していなかった。

何故、そんなにミスを恐れるのか。いや、彼の前でミスをするのを恐れるのか、彼女の頭脳は答えを導き出せなかった。同族に賞賛された頭脳も、酷く惨めに思える。一方で彼のことだから仕方ない、と非常に非合理的な答えで満足しようとしている自分がいる。

このように、天才の名を欲しいままにしていたエイリンが、クロに関わると著しくパフォーマンスが落ちるのだ。だが、不思議な事に作業の効率は上昇している。

彼の為を思えば、見たことも聞いたこともない言語を――このような辺境の、未開惑

星の言語など役にも立たない――一日で解読し覚えることは、流石のエイリンでも不可能であると思えたが。異常なほどに高まったモチベーションが可能にさせたのは、本人も驚いたぐらいだ。

一方でクロが側にいないと、胸を圧迫されるような感覚に襲われる。自分以外の誰かがいると、更に顕著となって明確な不快感を覚えた。この感情の正体は何なのだろうか？

後で、クロに聞かなければ。クロはきっとこの正体を知っている筈だ。

だのに今日、彼は愛の正体を誤魔化した。知っている筈なのに、何故？

彼を困らせたくなくて、断念したものの、いつかは彼の口から愛を教えてほしい。

（――もっと、もっと教えて。アナタのことを、私に教えて）

意味のない行為だと、エイリンの理性は答える。そんな事は百も承知だ。

だが、エイリンは画面のクロに手を伸ばし、それは何ものにも触れる事なくホログラフモニターを突き抜けた。そこに、彼の体温はない。彼の息遣いはない。ただ、モニターが発する極々微弱な電磁波がエイリンの掌に微かな違和感を与えるのみであった。

エイリンが思索に没している間、ようやく彼らに動きがあった。

「お、おいっ――！」

彼の慌てた声に現実へ引き戻される。

画面に目をやると、丁度イリアがクロの手を繋ぎ引っ張ってゆく所だった。
瞬間、エイリンの胸中にドス黒い何かが渦巻き視界も真っ赤に染まった。無意識に一番近くにあった物を手に取り、画面に向けて思い切り投げつけていた。それは虚しくモニターを突き抜け、――一瞬の波紋を作るも――反対側の壁にぶつかり、ガシャンと音を立てて壊れた。
『異常を感知。ご無事ですか、エイリン博士?』
機械音声が響く。職務に忠実なオモイカネが、プログラム通りの応答でエイリンに呼び掛ける。
自分が設計したソレも今はひたすらに神経を逆撫でた。
『十秒間の未回答を確認。マニュアルに則りアンドロイドを「五月蝿いわね!!」――回答を確認』
『エイリン博士の体温及び脈拍及び血圧の上昇を確認。極度の興奮状態と認めます。三十%の確率で未知の病気の「黙りなさいって言っているのよ!!」可能性。』
融通の効かなさにエイリンは苛立ち、叫んだ。
(オモイカネ!　個体名エイリンの常設記録をオフになさい!)
『エイリン博士。常設記録を切る事は推奨されて「いいからやりなさい!」――了解。個体名、エイリンの常時監視をオフに移行。尚この機能は緊急回避の為一時間後に自動で

オンになります』

機械音声の言葉を最後に、エイリンの部屋から一切の明かりが一斉に切れた。最低限の機能を残し。

今迄エイリンは、オモイカネを五月蝿いとも煩わしいとも思ったことは、ただの一度も無かった。何せ開発者の、一人なのだから。自分の理想を体現したシステムに。どうして文句があろうか。

だが、今日始めて、オモイカネを邪魔だと思った。

そして未だ胸中に渦巻く感情の正体も、処理の仕方も解らず、エイリンは椅子に持たれかけ静かに目を閉じた。